キャンパス・施設の整備

前章で見た4分科大学の設立が完了するとキャンパスの本格的な整備が始まった。本部構内では1910年代半ばから30年代前半にかけて多くの建築物が建てられ、建蔽率からすると戦後の高度経済成長期のキャンパスに近い状態にまで至る。それに伴って各門を結ぶ構内の道路が確立され、構内中央に文系諸学部、それを取り囲むような理工系学部という現在の建物配置もほぼ定まった。

個々の建築物について見ると、2階建て煉瓦造りが主体であり、以前の時期のものと比べると装飾的要素が増し、それぞれに個性的な外観をもつようになる。これらの建築物は、キャンパスに落ち着いた雰囲気をもたらす一方、帝国大学の権威性を象徴するものともなった。なお、写真の建築物のいくつかは現在京大の歴史的建造物に指定され、保存の対象となっている。

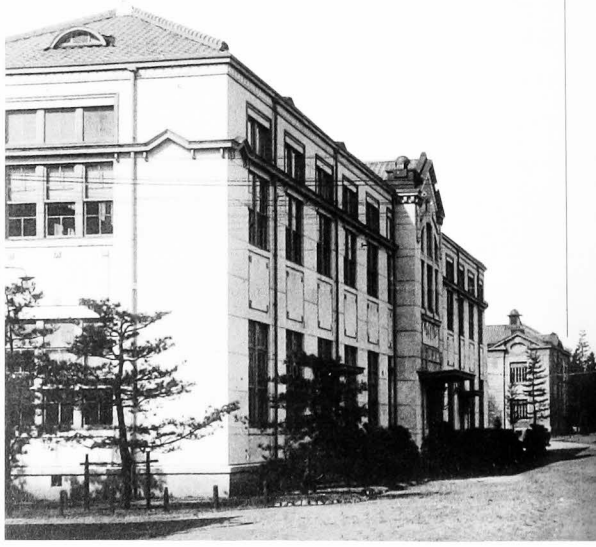
一方、研究とともに診療という社会的役割を持つ医科大学・医院の施設整備は急がれ、本部構内より一足早く1910年前後にはほぼ終了した。この時期、眼科学教室などいくつかの建築物が医院本館とは万里小路通をはさんだ西地区に新たに建設されている。当時の医科大学・医院構内の景観は、戦後の再開発まで基本的には保たれていた。

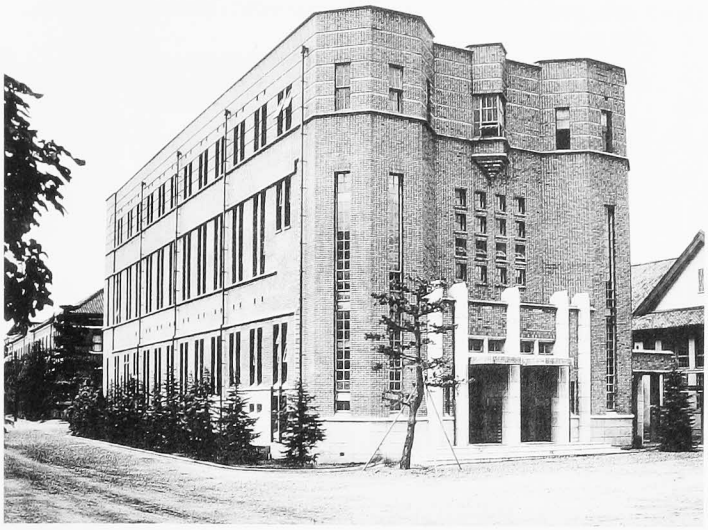
1932年当時の本部構内建物配置図。正門から本館の左側をまわって裏門へ抜ける道路、東門から西へ走る道路が確立されている。図中の①は写真3-2、②は3-3、③は3-4の撮影位置を示す。(3-1)

文学部陳列館(1914年竣工、山本治兵衛・永瀬狂三設計)。建物正面と東辺が現存。(3-2)

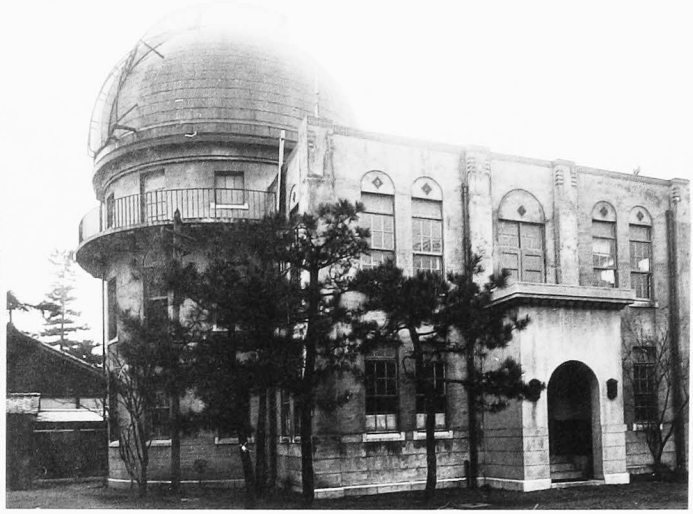
本部構内北門。北部構内への通路となる北門は、1930年頃現在の姿に整備された。写真は1940年のもの。(3-3)

裏門へ抜ける道路(1918年ごろ)。左側の建物は本部事務所、その後ろに文学部陳列館が見える。(3-4)





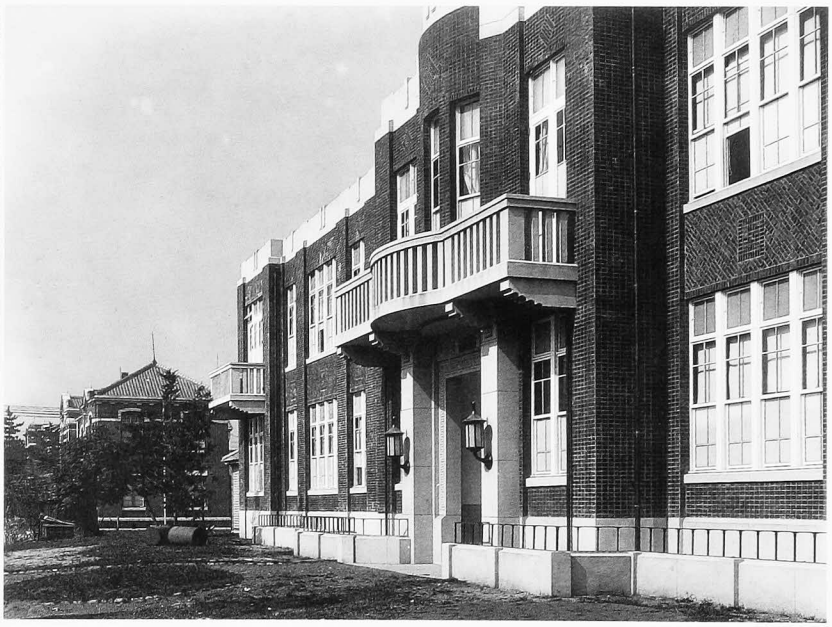
法学部経済学部新館(1933年竣工、大倉三郎設計)。現在は本館と呼ばれている。建物左側のヒマラヤ杉は、今は建物よりも高く成長している。(3-5)



理学部宇宙物理学教室(1924年竣工、武田五一・永瀬狂三設計)。(3-6)

工学部土木工学教室本館(1917年竣工、山本治兵衛・永瀬狂三設計)。現存。(3-7)

工学部建築学教室本館(1922年竣工、武田五一設計)。現存。(3-8)



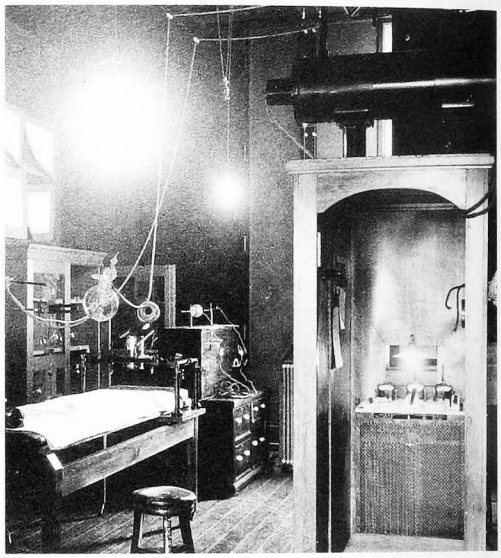
理学部化学教室本館(1914年竣工、山本治兵衛・永瀬狂三設計)。(3-9)

キャンパス・施設の整備

附属医院構内の地下道。万里小路通をはさんだ東地区と西地区とを結んだ。現存。(3-10)

皮膚病学黴毒学教室本館(1914年竣工、山本治兵衛・永瀬狂三設計)。(3-11)

教官・看護婦の記念撮影。(3-12)



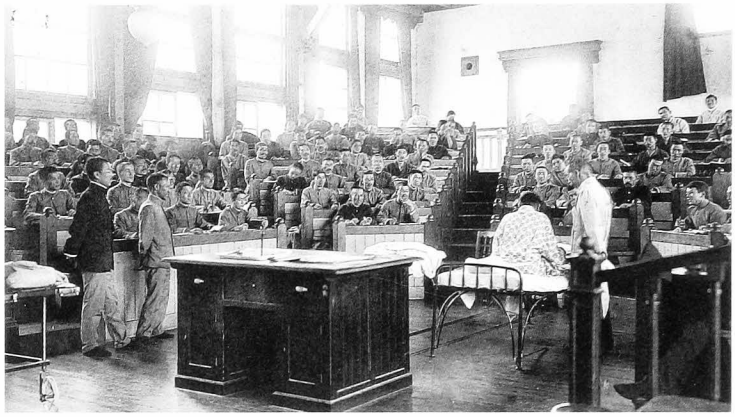
整形外科X放射線室。(3-13)

眼科学教室本館(1910年竣工、山本治兵衛設計)。(3-14)

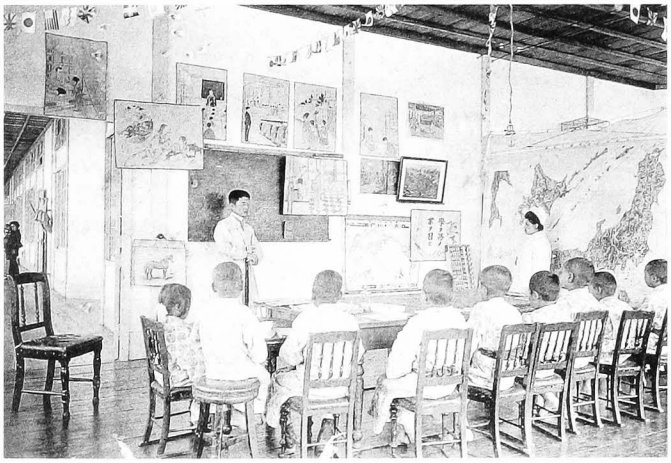
薬局風景。(3-15)

小児科学生予診の様子。(3-16)

小児科種痘実習の様子。(3-17)

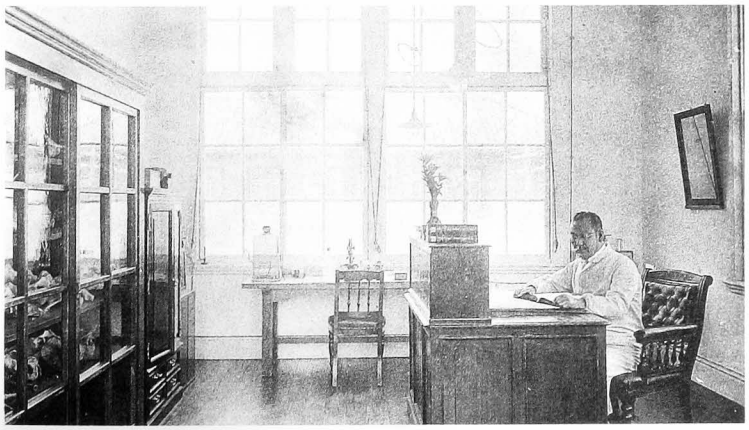


内科学臨床講義の様子。(3-18)



児科学校の授業の様子。小児科に入院している子どもを対象に行われていた。(3-19)

外科病室内部。(3-20)



婦人科学産科学教授室。(3-21)

附属医院における消防演習の様子。(3-22)

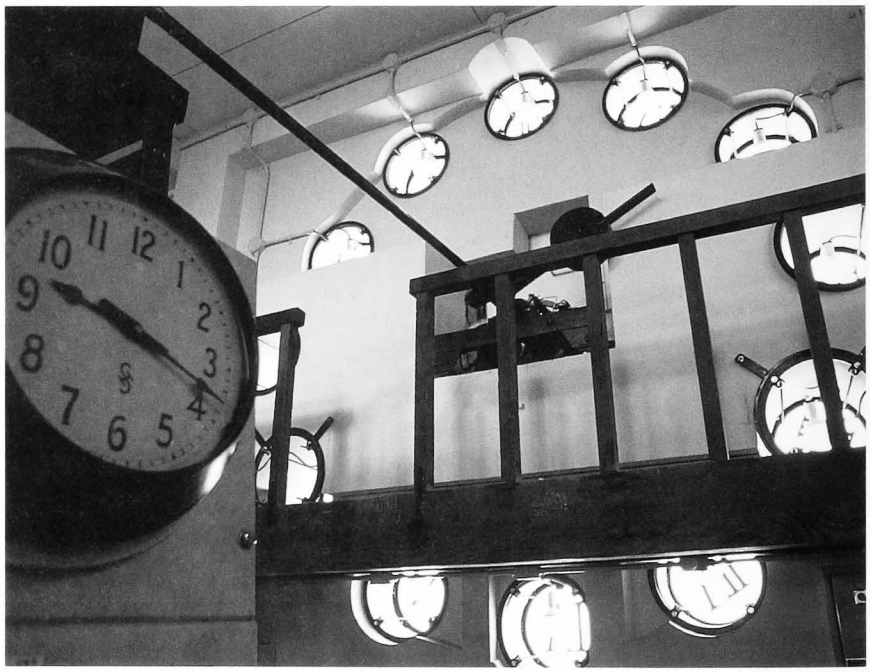
時計台の竣工

現在「時計台」として親しまれている本部本館は、1925(大正14)年に竣工したものである。もともとこの場所には第三高等中学校以来の本館(写真2-12)があったが、1912年に焼失しており、10年以上の空白の後の完成となった。設計の中心は工学部建築学教室教授の武田五一であった。

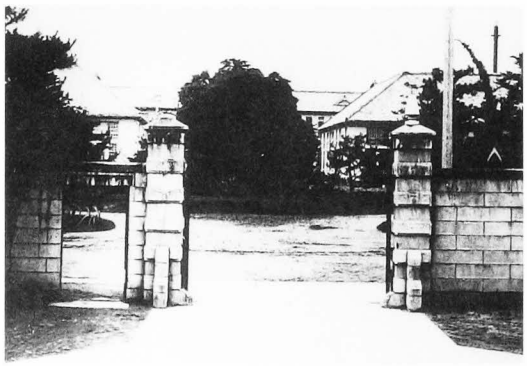
建物の2階には総長室、貴賓室などの他に2,000人を収容する大ホールが置かれ、入学宣誓式や卒業式をはじめ各種の儀式が執り行われた。また1階には法学部・経済学部の教室があったが、特に第1教室は学内で最も広く、授業だけでなく、様々な講演会や学生大会などにも使われた。このように、時計台はそのひときわ目立つ外観もあって、京大のシンボルとしての役割を現在まで果たし続けているのである。東京帝国大学の大講堂(安田講堂)の竣工も京大の時計台とほぼ同時期であり、この時期は大学の建築史を考える上で重要な意味をもつと思われる。

なお、時計台前の楠は、時計台竣工以前に植えられたようだが、この木は1934(昭和9)年の室戸台風で倒れてしまい、現在の木はその後に植えかえられた2代目である。

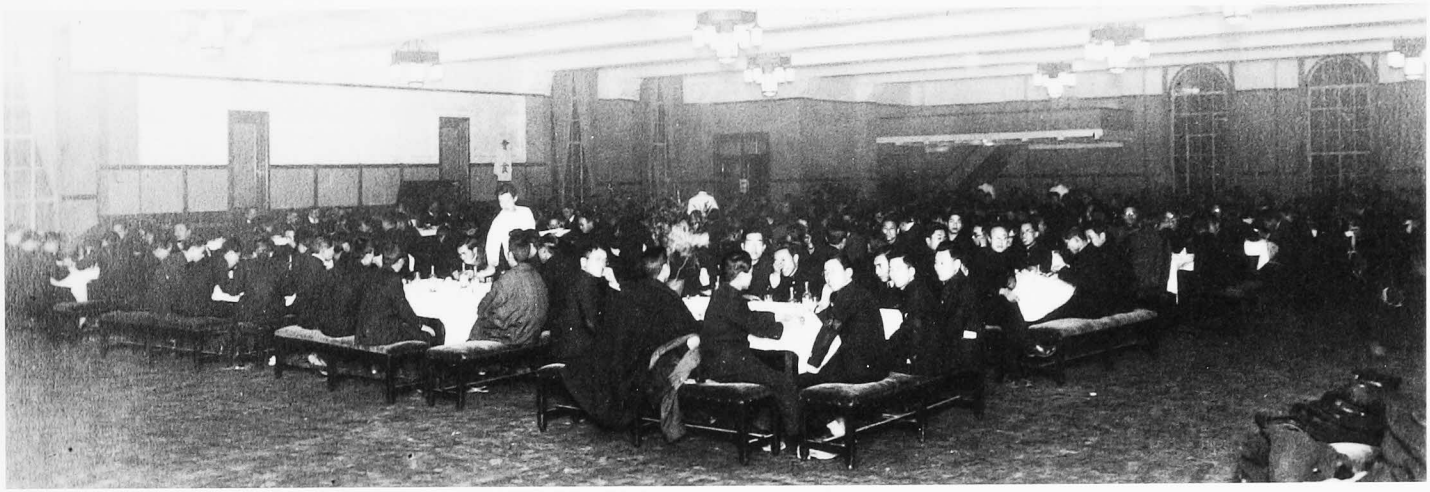
本部本館(1925年竣工、武田五一・永瀬狂三・坂静雄設計)。創立時の本館が1912年に焼失したあとを受けて建てられた。通称時計台、現存。総長室や大ホールが置かれ、大学のシンボル的存在となった。右側の煙突は本館北側のボイラー室のもので、本館竣工直後に建てられた。(3-23)



本館時計塔内部。時計はドイツのジーメンス社から購入した。写真は現在の姿。(3-24)

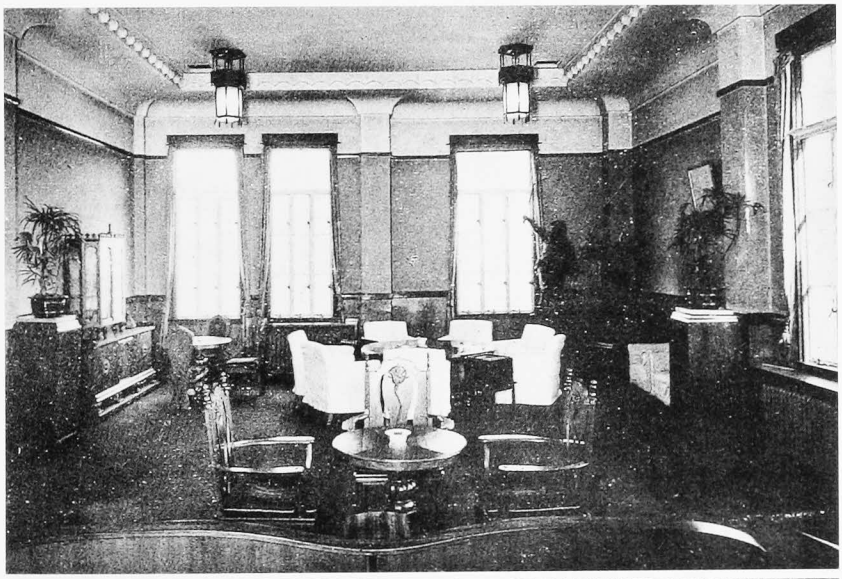


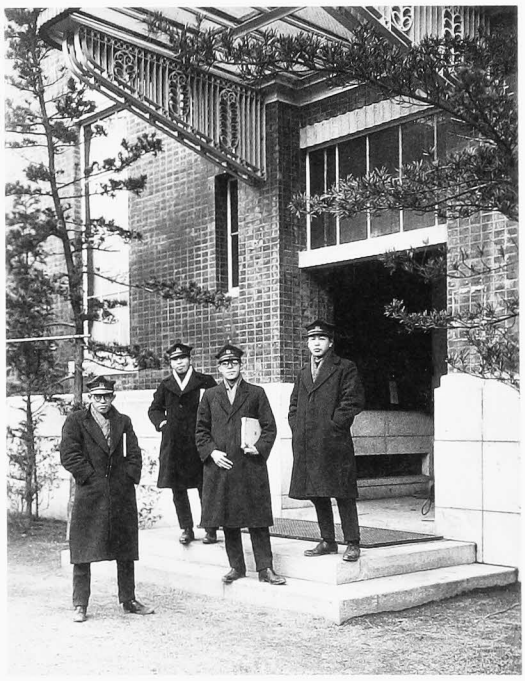
本館着工前の正門風景。創立時の本館焼失後約10年はこのような風景だった。(3-25)



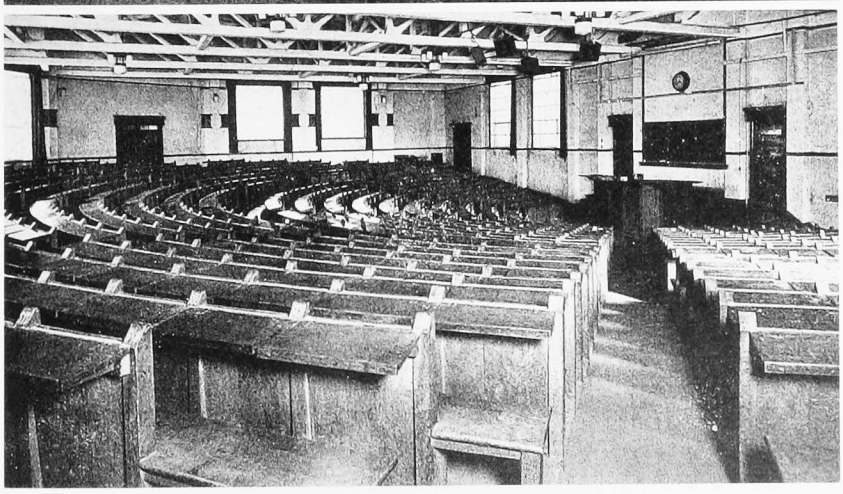
本館2階にあった大ホール。全学的行事やパーティーなどに使用された。(3-26)

本館2階の総長室。(3-27)



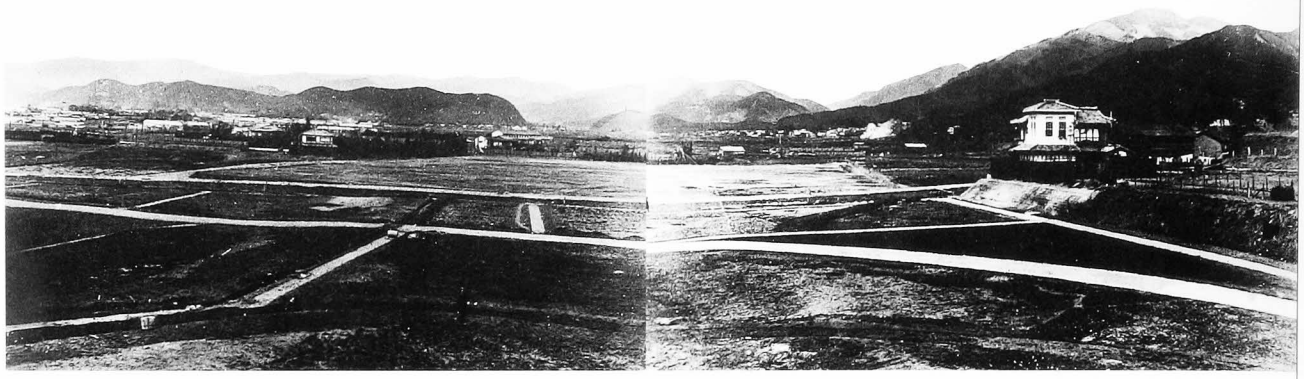


本館側面の入口。上部の装飾のついた庇は現存していない。(3-28)



本館1階の法経第1教室。全学で最も大きな教室として講演会などにも使われた。日本の大学で初めて授業に拡声器が使用された教室ともいわれている。(3-29)

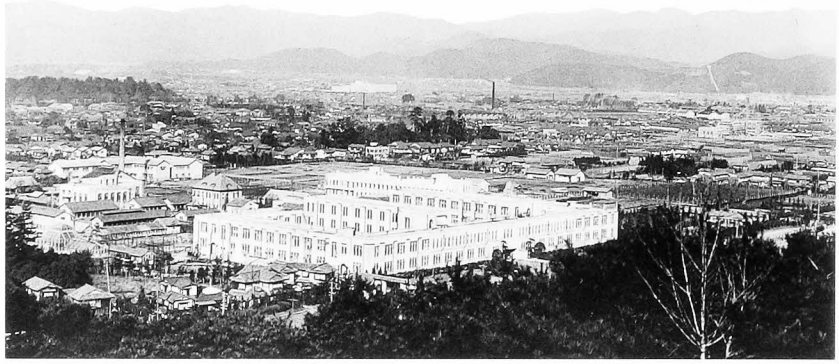
北部構内の整備



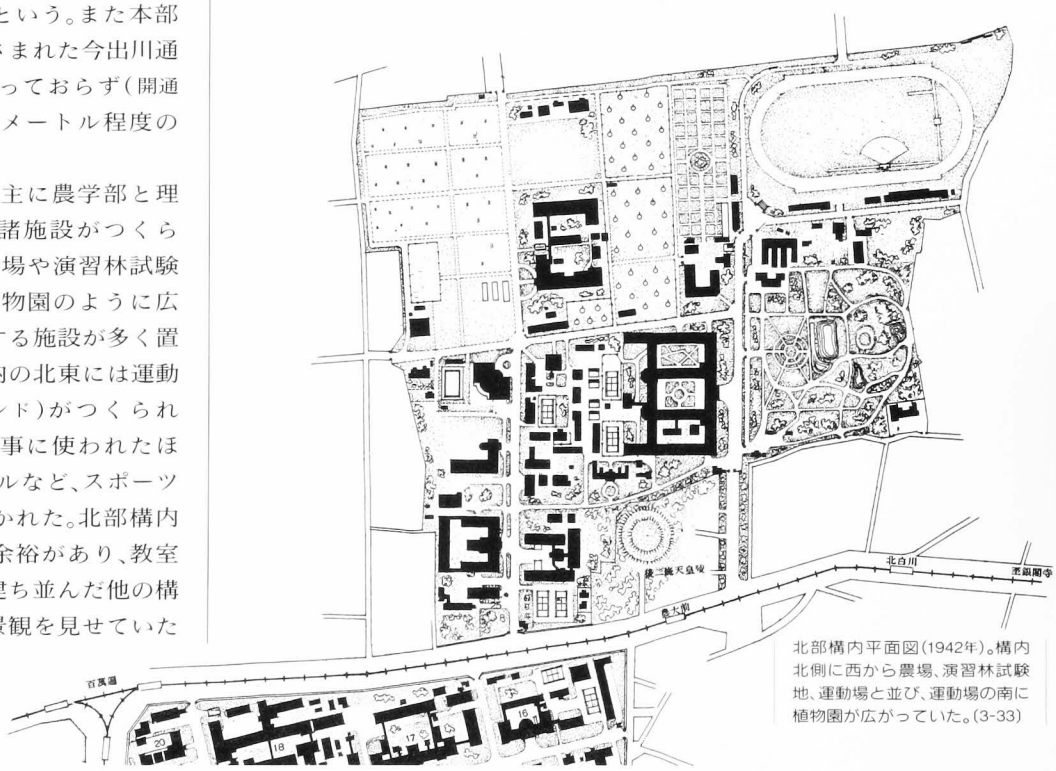
造成中の北部構内。南側より北をのぞむ。(3-30)　造成中の北部構内。南側より北東をのぞむ。(3-31)

学部の増設、学生の増加に伴い、新たな敷地として現在の北部構内が取得された。はじめ1917(大正6)年に敷地の西南部分が理科大学用地として買収され、続いて1921年、農学部設置が具体化するなかで、京都市より多額の寄付をうけて残りの構内全域が買収された。当時の北部構内周辺は人家もまばらで、北側には菜の花畑が広がり松ヶ崎のあたりまで目を遮るものはなかったという。また本部構内との間にはさまれた今出川通も、まだ市電は走っておらず(開通は1929年)、道幅数メートル程度の狭い道であった。

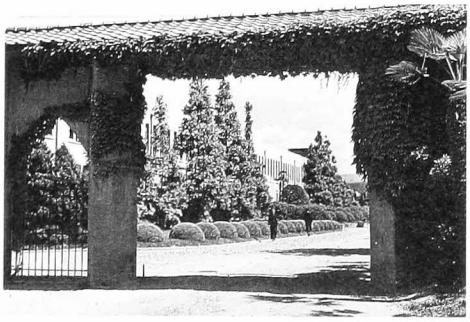
北部構内には、主に農学部と理学部に関係する諸施設がつくられ、農学部附属農場や演習林試験地、理学部附属植物園のように広い緑地を必要とする施設が多く置かれた。また、構内の北東には運動場(農学部グラウンド)がつくられて種々の大会・行事に使われたほか、武道場やプールなど、スポーツ関連の施設も置かれた。北部構内は建物の配置に余裕があり、教室や実験棟などが建ち並んだ他の構内とは異なった景観を見せていたのである。



北部構内遠景。中央に見えるのが農学部本館。(3-32)

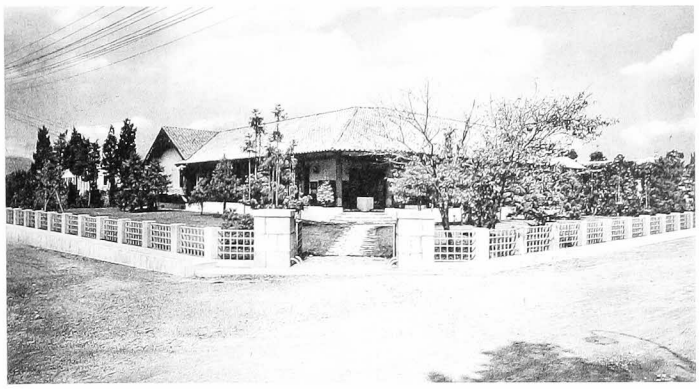


北部構内平面図(1942年)。構内北側に西から農場、演習林試験地、運動場と並び、運動場の南に植物園が広がっていた。(3-33)



農学部正門から本館をのぞむ(正門は1924年竣工、森田慶一設計)。(3-34)

今出川通から農学部正門に至る道路。現在は異なった景観になっている。(3-35)



農学部附属演習林事務室(1931年竣工、大倉三郎・関原猛夫設計)。現存。(3-36)

武道場とプール。(3-37)

農学部グラウンド。写真は1926年の運動会の様子。(3-38)

理学部地質学鉱物学教室本館(1922年竣工、永瀬狂三設計)。(3-40)

理学部附属植物園。現在とは異なる広々とした姿を見せている。(3-39)

理学部物理学教室本館(1930年竣工、大倉三郎設計)。(3-41)

理学部動物学植物学教室本館(1936年竣工、大倉三郎・内藤資忠設計)。(3-42)

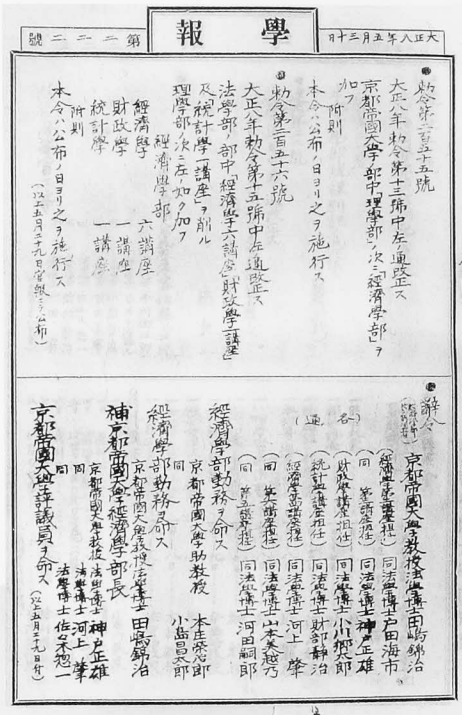
学部・研究所の新設

第一次世界大戦による経済発展を背景に、1910年代後半から20年代前半にかけて高等教育機関の拡充政策が展開されるようになる。京大ではこの時期、経済学部と農学部（各帝国大学の分科大学は、1918年12月公布の大学令によって「学部」と改称された）が置かれ、また化学研究所が京大最初の附置研究所として設置された。

京大における経済学関連の講座は、当初は法科大学に属していたが、やがて分離独立への動きが強まり、1919（大正８）年５月に経済学部が設置された。教官も法学部から異動し、彼らは経済学会や経済学批判会を母体として活発な研究活動を繰り広げ、当時の学生たちの間でも非常に評判が高かったという。

農学部設置の背景は経済発展に伴う人口の増大と農産物需要の高まりであった。1920年から準備作業が始まり、設置は1923年11月となった。創設時の農学部では６学科の名称の多くに「農林」と冠していたが、これは農と林とを区別せず、研究対象ではなく方法によって学科を分け、研究重視の学風を築こうとしたためとされている。

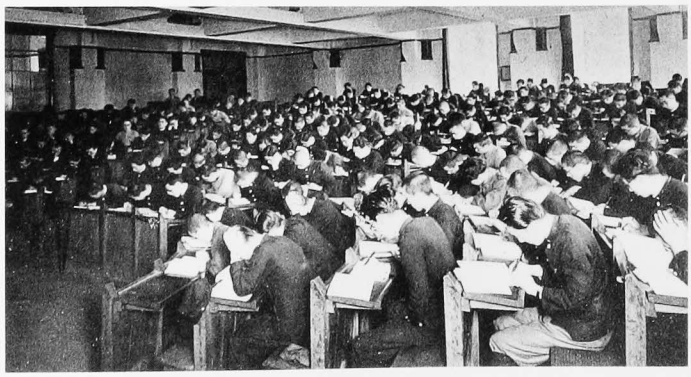
化学研究所の設置は1926年10月であった。第一次大戦によるドイツからの化学製品の輸入途絶は京大における本格的な化学研究を促したが、その研究成果が認められて設置されたものであった。


學報
大正八年五月三十日（金曜）
第二二二號
勅令第二百五十五號
大正八年勅令第十三號中左通改正ス
京都帝國大學學部中理學部ノ次ニ經濟學部ヲ加フ
附則
本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
勅令第二百五十六號
大正八年勅令第十五號中左通改正ス
法學部ノ部中經濟學ニ關スル講座及財政學講座
統計學講座ヲ前ル
理學部次ニ左ノ如ク加フ
經濟學部
六講座
一講座
財政學
一講座
統計學
附則
本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
（大正五年五月三十九日官報ニ公布）
辭令
京都帝國大學教授法學博士田崎弟治
同法學博士戸田海市
同法學博士神戸正雄
同法學博士小川賀太郎
同法學博士財部靜治
同法學博士河上肇
同法學博士山本美越乃
同法學博士河田嗣郎
京都帝國大學助教授
小島昌武郎
本庄榮治郎
經濟學部勅務ヲ命ス
京都帝國大學教授法學博士田崎弟治
經濟學部勅務ヲ命ス
神戸正雄
京都帝國大學經濟學部長
京都帝國大學教授法學博士
京都帝國大學教授法學博士河上肇
京都帝國大學教授法學博士佐々木惣一
京都帝國大學評議員ヲ命ス
（大正五年五月三十九日官報ニ公布）

経済学部設置を報じる『学報』（1919年5月30日付）。教官の顔ぶれもわかる。(3-43)

法学部経済学部研究室（1916年竣工、山本治兵衛・永瀬狂三設計）。経済学部は法学部と建物を共用した。(3-44)

経済学会大会（1927年）。(3-45)



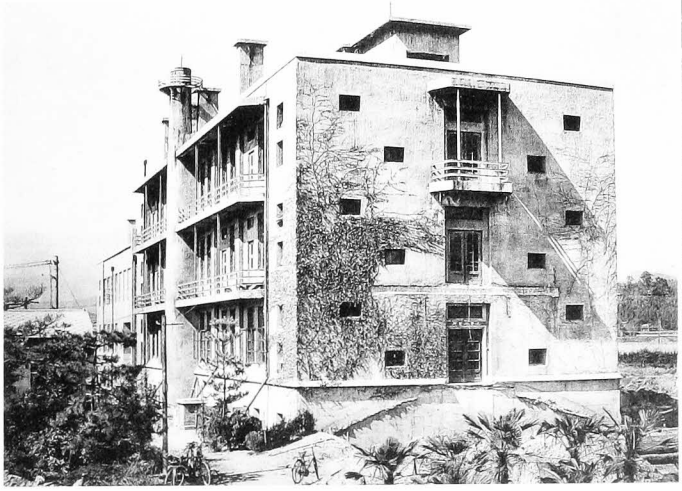
経済学部授業の様子。(3-46)

農林経済学科の現地見学会(1937年ごろ)。(3-47)

農学部本館(1923年竣工、武田五一・永瀬狂三・森田慶一・坂静雄設計)。(3-48)

農場における田植え実習の様子(1928年ごろ)。(3-49)

農場における牛耕の様子(1927年ごろ)。右後方の建物は農学部附属農場の事務室。(3-50)



化学研究所本館。1930年大阪府三島郡磐手村(現:高槻市)に建てられた。(3-51)

化学研究所の記念碑。現在大阪医科大学構内にある。化学研究所は1968年宇治に移転した。(3-52)

遠隔施設の設置

この時期京大では、農学部・理学部を中心に遠隔地に多くの附属施設が設置された。

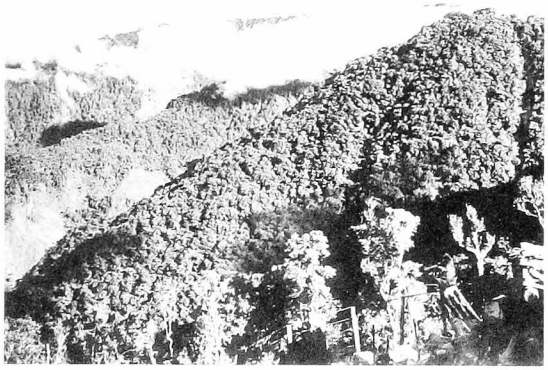
そのなかでも農学部附属演習林は規模が圧倒的に大きく、独自の役割を持った。京大は台湾(1909年)・朝鮮(1912年)・樺太(1915年)と、当時の植民地に3カ所の演習林を保有しており、これらの面積の合計は10万haをこえていた。演習林では、研究・教育以外に造林事業も行われ、大学の財政運営上一定の役割を果たしたが、植民地においては治安の問題もあり、必ずしも経営が順調でなかったところもあった。植民地の演習林は、国家の大学としての帝国大学の側面を象徴するものともいえる。

演習林以外にも、最新の設備をもった施設が遠隔各地に設けられた。これらの施設は、観測・実験機能が中心であり、大学がより実践的な側面で社会との関わりを深めていく証左ということができる。

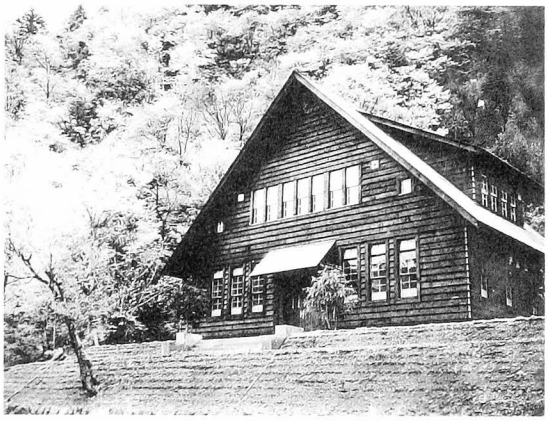
化学研究所の樺太ツンドラ実験工場(1933年樺太庁より移管)。(3-53)

樺太演習林事務所。(3-54)

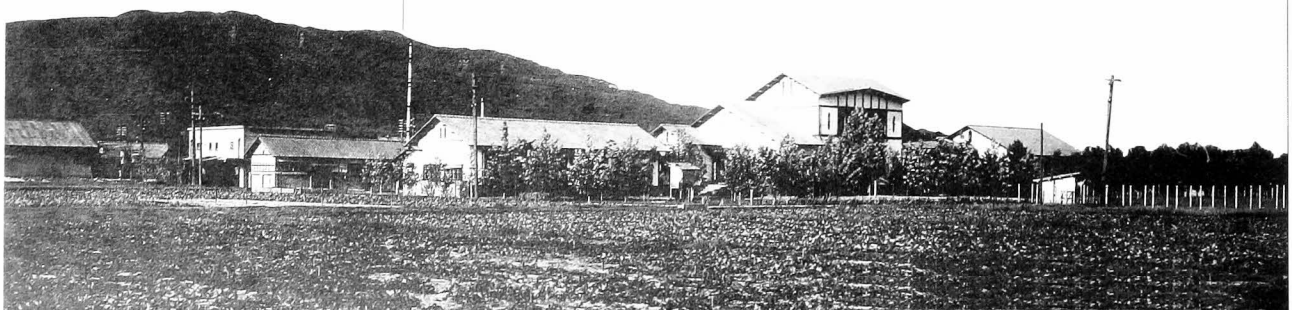
朝鮮演習林事務所。(3-55)



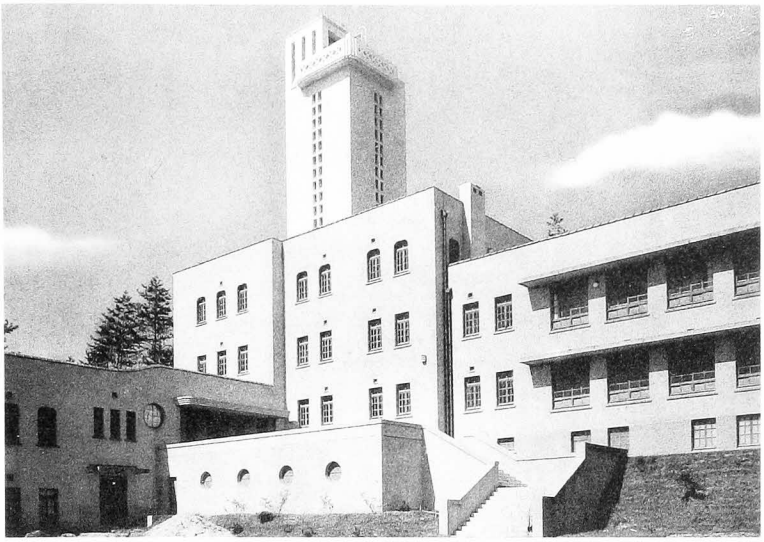
台湾演習林の風景。(3-56)



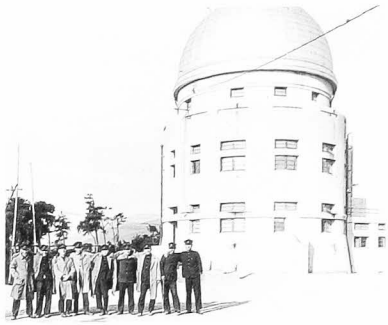
芦生演習林事務所
(1921年開設)。(3-57)

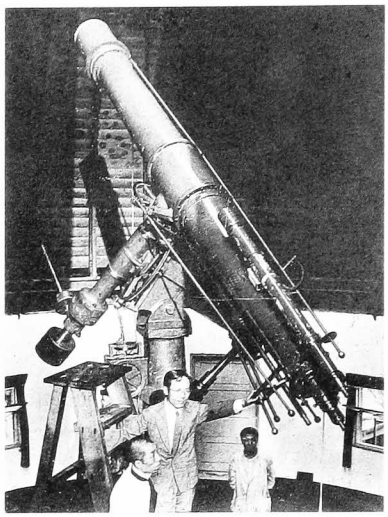


農学部附属摂津農場(1924年開設)。(3-58)

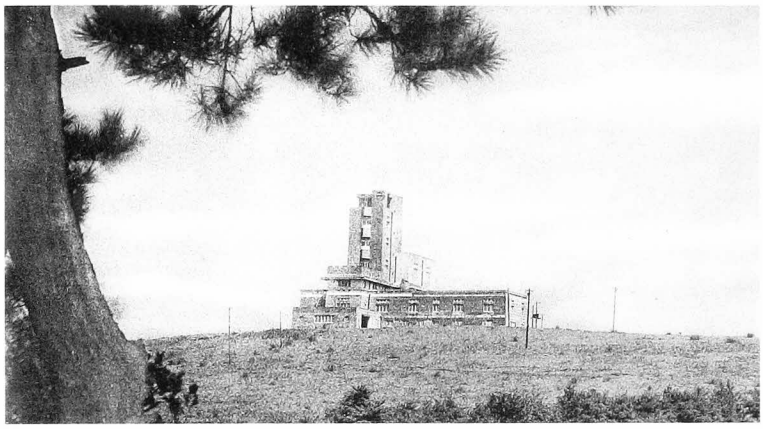


理学部附属阿武山地震観測所(1930年開設)。現在は防災研究所の地観測所となっている。(3-59)

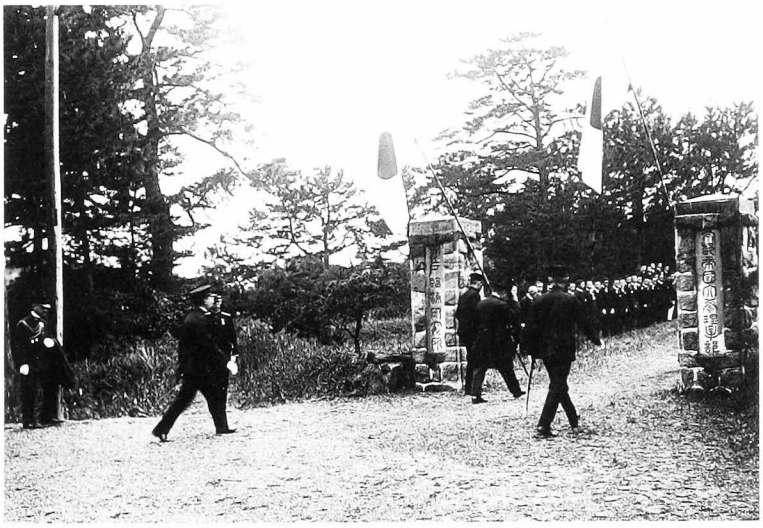




理学部附属花山天文台(1928年開設)とその内部。(3-62)(3-63)

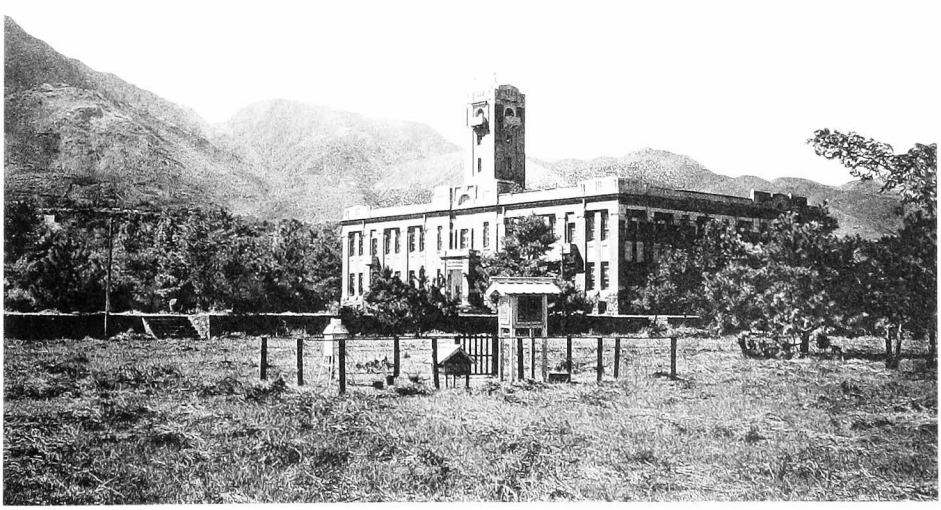


火山研究所(1927年熊本県阿蘇郡に開設)。のち理学部附属火山温泉研究所阿蘇研究所、さらに同火山研究施設と改称された。(3-60)



理学部附属瀬戸臨海実験所(1922年和歌山県白浜町に開設)。写真は1929年の昭和天皇来所時の様子。(3-61)

大津臨湖実験所(1914年開設)。はじめ医科大学の附属研究施設だったが、1922年理学部附属となった。写真は1927年竣工の2代目の建物。(3-65)



地球物理学教室の研究所(1926年別府市に開設)。のち理学部附属火山温泉研究所別府研究所、さらに同地球物理学研究施設と改称された。現存。(3-64)

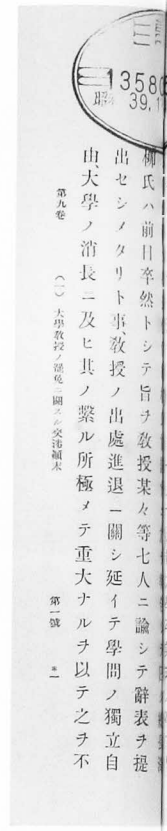
大学自治の進展

戦前の帝国大学におけるいわゆる大学自治事件には大きく分けて三つの争点があった。それは、①大学教授の研究・教育・言論の自由の問題、②①と密接に関係する大学教授の身分保障の問題、③総長の学内互選の問題、の3点であった。

歴史上著名な滝川事件の以前にも、1905(明治38)年の東大戸水寛人教授処分に対する法科大学の東大支援に始まり、1908年の岡田良平総長退職事件、1911年の岡村司法科大学教授譴責事件、そして1913〜14年の沢柳事件など、京大では数多くの大学自治関係の事件が起こったが、いずれも上記三つの問題がからみ合い、教授陣、総長、政府当局者の三者を主体として種々の様相を見せたのである。なかでも、総長による7教授免職に端を発した沢柳事件は、京大全体を巻き込む大事件となり、結果として教授による総長互選を京大にもたらすという非常に重要な意味をもつ事件となった。

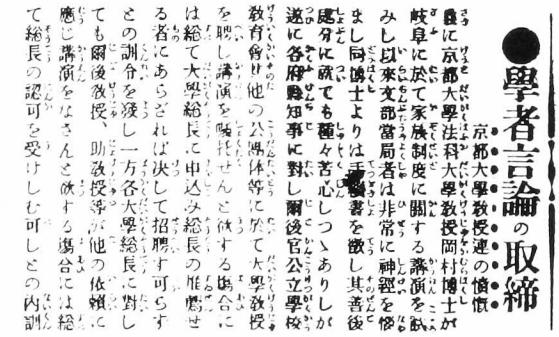
しかし、帝国大学における自治は③の総長互選の実現にとどまり、①および②は、その時々の政治・社会状況によって大きく左右され、結局確立することはなかったのである。

岡田総長退職事件について記した史料。(3-66)



柳氏ハ前日卒然トシテ旨ヲ教授某々等七人ニ論シテ辭表ヲ提出セシメタリト事教授ノ出處進退ニ關シ延イテ學問ノ獨立自由、大學ノ消長ニ及ヒ其ノ繫ル所極メテ重大ナルヲ以テ之ヲ不

第九卷　(一)大學教授ノ退處ニ關スル交渉顛末　第一號

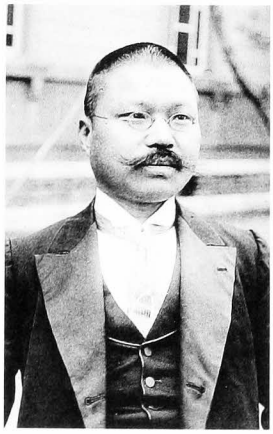


●學者言論の取締

●京都大學教授連の憤慨

●京都大學法科大學教授岡村博士が岐阜に於て家族制度に關する講演を試みし以來文部當局者は非常に神經を惱ましに同博士よりは手紙書を徴し其善後處分に就ても種々苦心つゝありしが遂に各府縣知事に對し爾後官公立學校教育會其他の公團体等に於て大學教授を聘し講演を囑託せんと欲する場合には總て大學總長に申込み總長の推薦せる者にあらざれば決して招聘す可らずとの訓令を發し一方各大學總長に對しても爾後教授、助教授等が他の依頼に應じ講演をなさんと欲する場合には總て總長の認可を受けしむ可しとの内訓を下せしよしにて大森府知事は流石に物議を恐れ同訓令は未だ各官商各學校等に移牒せざるも尚略大阪府知事の如き既に此程之に關する府令を發せしよし、又菊池京都大學總長も未だ正式に之を各教授等に傳達せざるよしなるも此事實を知りし法科各教授の如き如何に文部省が神經過敏なりとて學者の言論に對し所の如き束縛を加ふるなどゝは餘りに亂暴なりとて非常に憤慨し現に此程大阪の某新聞社の主催に係る講演會にも京都大學より一二の講師を勧する積にて直接某々教授に依頼せしも某々氏は何分文部省より全體を厳められ居れば浮かり聯る事は出來ぬ、夫れは寧ろ文部省の役人に依頼し所謂通俗教育のお伽噺でもして貰つた方宜しからんなど答へ之を拒絶せしより止むなく同志社某々教授に依頼せしよしなるが京都大學教授連は決して此束縛に甘んせず何れ遠からず東京大學の教授連とも氣脈を通じ文部省に迫り正々堂々學者言論の自由を主張せんと目下寄り寄り協議中なりと

岡村事件関係の新聞記事(『京都日出新聞』1911年7月8日付)。言論の取締りへの憤慨の意が記されている。(3-67)



岡村司(1866〜1922)。講演の内容が家族制度を批判したものとして譴責処分を受けた。(3-68)

荒木寅三郎(1866〜1942)。1915年に総長に就任し、1919年の初の選挙でも引き続き選ばれた。1929年3月までの14年間の総長在任は歴代最長。(3-72)

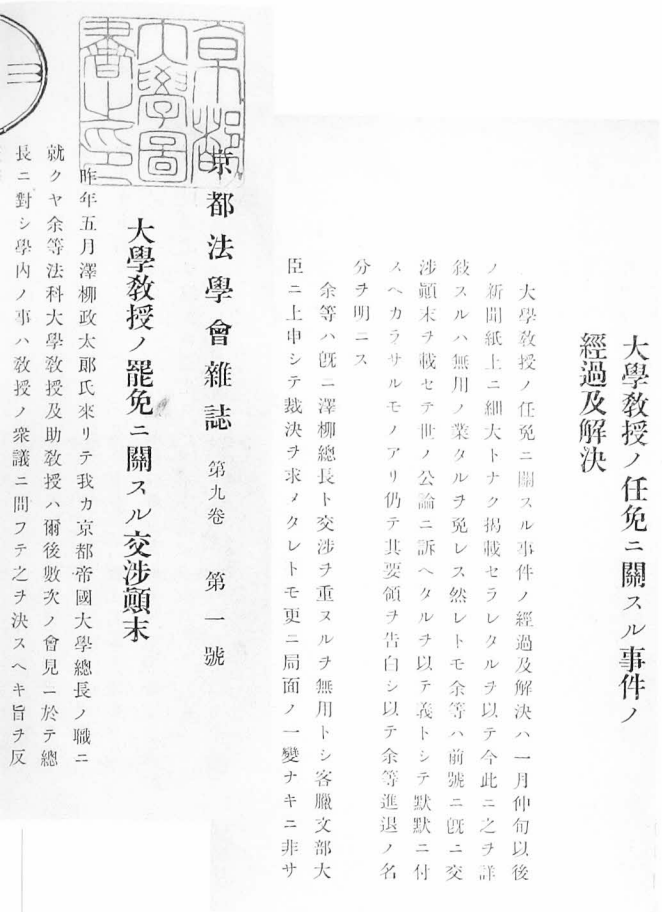
其他ノ医学ニ関シテハ投票用紙、住地ニ在ル者ノミニ限リ之ヲ配布ス

第七條　投票ハ各學部長立會ノ上事務官之ヲ開封ス

大正八年四月十七日五名ツツ各學部委員本部大會議室ニ集合シ之ヲ決議ス

以上

沢柳事件に関する風刺画(『京都帝国大学寄宿舎誌』1914年1月)。学生の目で見た事件の構図がわかる。なお右上の「奥田」とは当時の奥田義人文相、先頭で火をつけている「仁保」は仁保亀松法科大学長。(3-70)



京都法學會雜誌　第九卷　第一號

大學教授ノ罷免ニ關スル交渉顛末

昨年五月澤柳政太郎氏來リテ我カ京都帝國大學總長ノ職ニ就クヤ余等法科大學教授及助教授ハ爾後數次ノ會見ニ於テ總長ニ對シ學内ノ事ハ教授ノ衆議ニ問フテ之ヲ決スヘキ旨ヲ反

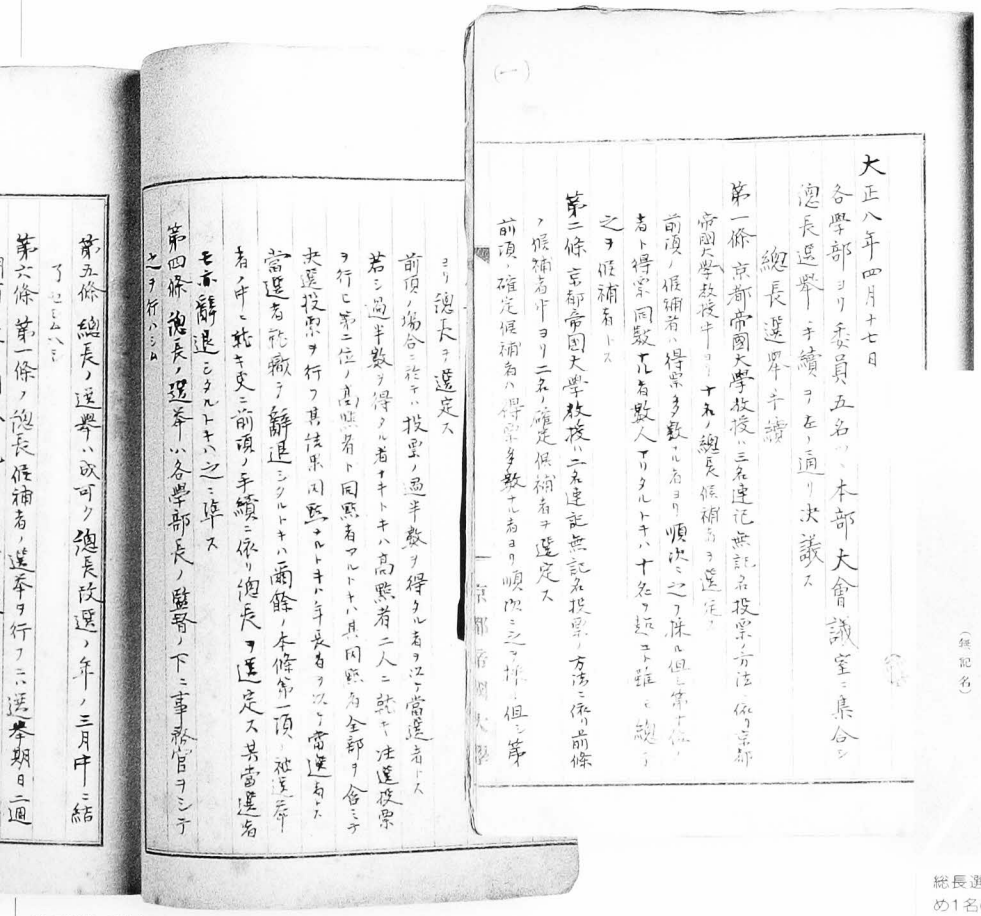
大學教授ノ任免ニ關スル事件ノ經過及解決

大學教授ノ任免ニ關スル事件ノ經過及解決ハ一月仲旬以後ノ新聞紙上ニ細大トナク掲載セラレタルヲ以テ今此ニ之ヲ詳敍スルハ無用ノ業タルヲ免レス然レトモ余等ハ前號ニ既ニ交渉顛末ヲ載セテ世ノ公論ニ訴ヘタルヲ以テ義トシテ默默ニ付スヘカラサルモノアリ仍テ其要領ヲ告白シ以テ余等進退ノ名分ヲ明ニス

余等ハ既ニ澤柳總長ト交渉ヲ重ヌルヲ無用トシ客臘文部大臣ニ上申シテ裁決ヲ求メタレトモ更ニ局面ノ一變ナキニ非サ

「大学教授ノ罷免ニ関スル交渉顛末」「大学教授ノ任免ニ関スル事件ノ経過及解決」(『京都法学会雑誌』9巻1号、2号、1914年)。法科の教官は、沢柳事件の顛末を雑誌に掲載し、自らの正当性を主張した。(3-69)

沢柳政太郎(1865〜1927)。1913年総長に就任した。自由主義的な教育家として知られていたが、京大での改革は成功しなかった。(3-71)



大正八年四月十七日

各學部ヨリ委員五名ツヽ本部大會議室ニ集合シ總長選擧ノ手續ヲ左ノ通リ決議ス

總長選擧手續

第一條　京都帝國大學教授ニ名連記無記名投票ノ方法ニ依リ京都帝國大學教授中ヨリ十名ノ總長候補者ヲ選定ス

前項ノ候補者ハ得票多數ナル者ヨリ順次ニ之ヲ採ル但シ第十位ノ者ト得票同數ナル者數人アリタルトキハ十名ヲ超ユト雖モ總テ之ヲ候補者トス

第二條　京都帝國大學教授ハ二名連記無記名投票ノ方法ニ依リ前條ノ候補者中ヨリ二名ノ確定候補者ヲ選定ス

前項ノ確定候補者ハ得票多數ナル者ヨリ順次ニ之ヲ採ル但シ第

ヨリ總長ヲ選定ス

前項ノ場合ニ於テハ投票ノ過半數ヲ得タル者ヲ以テ當選者トス若シ過半數ヲ得タル者ナキトキハ高點者二人ニ就キ決選投票ヲ行ヒ第二位ノ高點者ト同點者アルトキハ其同點者全部ヲ含ミテ決選投票ヲ行フ其結果同點ナルトキハ年長者ヲ以テ當選者トス

當選者能ハサルヲ辭退シタルトキハ兩餘ノ本條第一項ノ被選擧者中ニ於キ更ニ前項ノ手續ニ依リ總長ヲ選定ス其當選者モ亦辭退シタルトキハ之ニ準ス

第四條　總長ノ選擧ハ各學部長ノ監督ノ下ニ事務官ヲシテ之ヲ行ハシム

第五條　總長ノ選擧ハ成可ク總長改選ノ年ノ三月中ニ結了セシムヘシ

第六條　第一條ノ總長候補者ノ選擧ヲ行フニハ選擧期日二週

総長選挙手続(1919年4月17日決議)。京大初の総長選挙は1919年5月に行われた。(3-73)

総長選挙投票用紙。第三次投票のため1名のみの記入となっている。写真は1933年の総長選挙時のもの。(3-74)

戦前期の学生生活　スポーツの隆盛

戦前の帝国大学では、学生のスポーツも盛んであった。既述のように学内の陸上・水上運動大会は中断されていたが、まもなく復活し、教官もまじえた学内行事として定着していった。

京大創立時には野球部とテニス部のわずか2部しかなかった運動部も次第に増加し、1940(昭和15)年には20を数えるようになった。このなかには、1936年ベルリンオリンピック三段跳びで世界新記録で金メダルを獲得した田島直人のいた陸上競技部や、1920年代後半明治・早稲田・慶応を連破して日本一に輝いたラ式蹴球(ラグビー)部など、その名を轟かせた部も少なくない。

1924(大正13)年10月には、運動週間といわれた東大の運動諸部との対抗戦が始まったが、東大以外の諸大学とも交流試合が活発に行われていた。さらに京大の運動諸部は、自らの試合だけでなく、高等学校・専門学校の競技大会も主催していた。インターハイと呼ばれるこの大会は、旧制の学校制度のもとでは帝国大学の運動部主催で行われることが多く、特に京大の運動部は積極的であった。

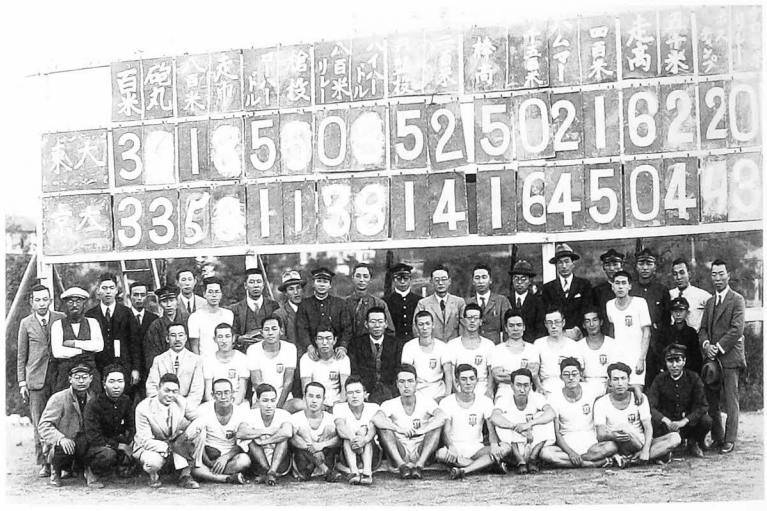
戦前期のスポーツ界において大学の運動部は中心的存在であったが、そのなかで人材の点でも組織の点でも京大が占める位置は大きなものがあったといえよう。

陸上競技大会。水上大会と同様、学友会主催で学部対抗の形で行われた。写真は1927年のものと思われる。(3-75)

陸上競技大会。教官も参加した余興的レースも行われた。(3-76)

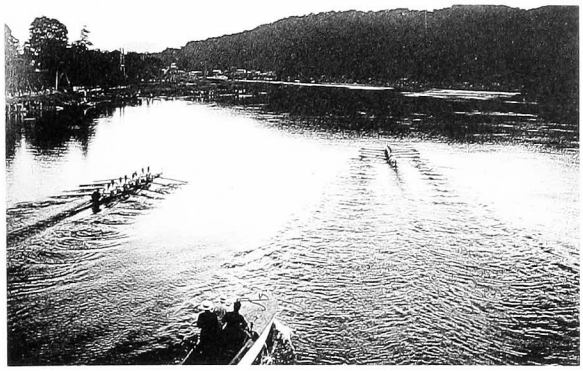
第6回水上大会で優勝した医科大学選手による学内パレード(1917年)。大会の注目度の大きさがわかる。(3-77)

第3回東大戦における陸上競技の得点表(1926年)。(3-78)

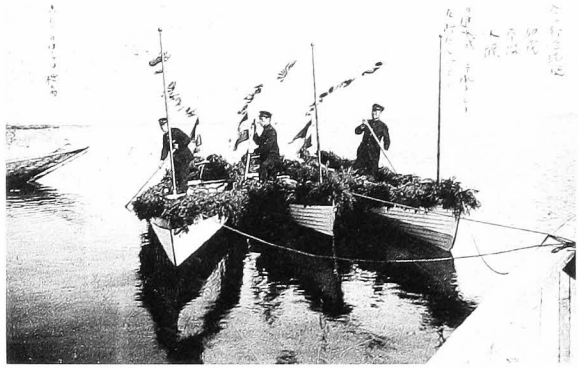


農学部グラウンド隅に現存するオリンピック・オーク。金メダルを獲得した田島直人が持ち帰った苗木を植えたもの。(3-79)

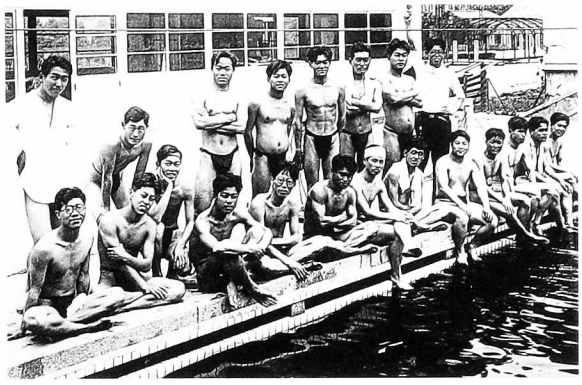
陸上競技部員。1920年代後半と思われる。(3-80)



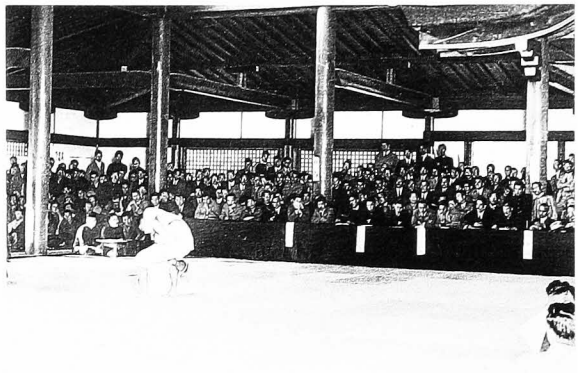
瀬田川で行われた端艇部第1回対東大戦(1920年)。左側が京大。(3-81)



端艇部期成同盟会による新艇の進水式風景(1905年)。(3-82)



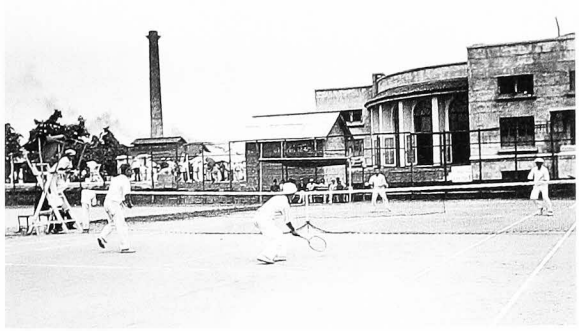
水泳部員たち。(3-83)



柔道部試合風景。(3-84)

ラグビー部試合風景。(3-85)

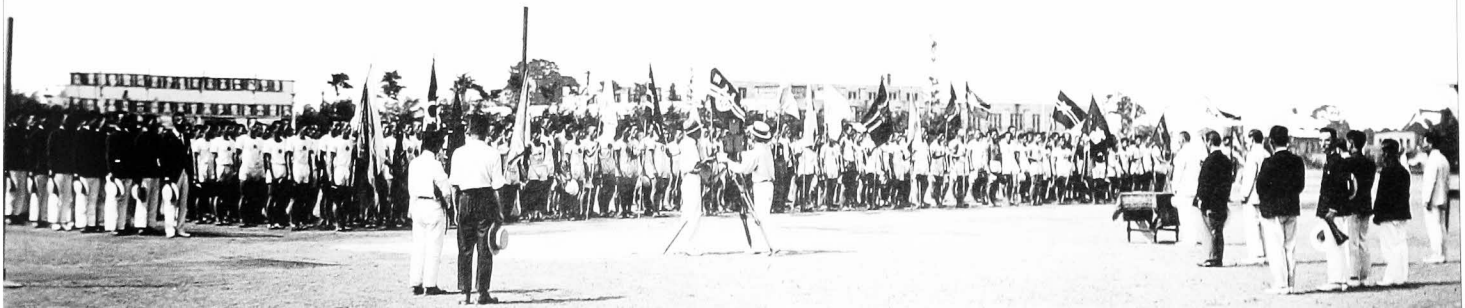
剣道部練習風景。(3-86)



テニス部試合風景。(3-87)

馬術部練習風景。(3-88)

農学部グラウンドで行われたインターハイ開会式。(3-89)



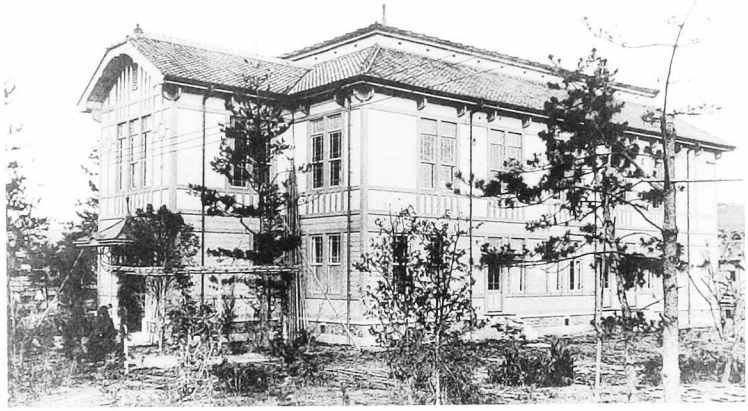
戦前期の学生生活　文化活動の展開

1909（明治42）年、学生相互の親睦を図ることを目的に以文会が設立され、茶話会や講演会を実施する親和部と、雑誌部の二つの部が置かれた。以文会は、すでに設立されていた運動会と1913年に合併、京都帝国大学学友会となる。学友会は、会長は総長、幹事には各学部長が就任していたように官製の色彩が強かったが、実際の運営の主体は学生であり、スポーツも含めた課外活動の担い手であった。（註1）

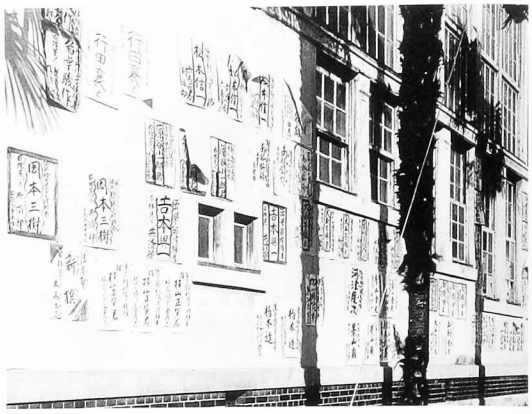
1920年代半ばになると、学生の文化活動は一気にピークに至る。1924年6月には、大学創立記念の園遊会が農学部グラウンドで開催された。この園遊会は翌年から5月に時期を移して行われ、模擬店、芝居上演など、学生たちの「祭り」の場として定着していった。また、1925年には『京都帝国大学新聞』が創刊される。これは前年の運動週間（前頁参照）における試合の報道がきっかけとなったもので、リベラルな立場を保ちながら、学内唯一のメディアとして貴重な役割を果たした。同じ1925年には楽友会館が竣工する。楽友会館は1922年の京大創立25周年の記念事業として建てられたもので、食堂や宿泊施設も備え、種々の学会や講演会が開かれた。

しかし、すでにこの時期は大正デモクラシーの末期にあたっており、大学、学生に対する思想統制は目前まで来ていた。学生たちの自由な文化活動はほんの束の間のことだった。

（註1）学友会は、1940年に同学会と改称された。



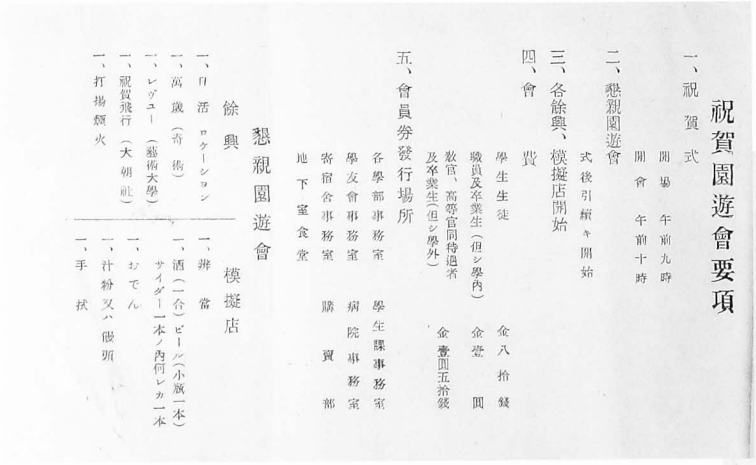
学生集会所（1911年竣工、山本治兵衛・永瀬狂三設計）。講演会や茶話会が催され、学生の文化活動の一つの中心となった。現存。(3-90)



学友会役員候補者ポスター。役員は選挙で選ばれた。写真は1929年。(3-91)

園遊会会場遠景。テントが張られ多くの模擬店が出た。(3-92)

園遊会会場の学生たち。踊っているのは高知の豪気踊。(3-93)



祝賀園遊會要項

一、祝賀式
開場　午前九時
開會　午前十時
二、懇親園遊會
式後引續キ開始
三、各餘興、模擬店開始
四、會費
學生生徒　金八拾錢
職員及卒業生（但シ學內）　金壹圓
教官、高等官同待遇者及卒業生（但シ學外）　金壹圓五拾錢
五、會員券發行場所
各學部事務室　學生課事務室
學友會事務室　病院事務室
寄宿舍事務室　購買部
地下室食堂

懇親園遊會

餘興
一、口活　ロケーション
一、萬歳（奇術）
一、レヴュー（藝術大學）
一、祝賀飛行（大朝社）
一、打揚煙火

模擬店
一、辨當
一、酒（一合）ビール（小瓶一本）サイダー一本ノ內何レカ一本
一、おでん
一、汁粉又ハ磯頂
一、手拭

大阪朝日新聞社長　村山龍平
京都帝國大學總長　新城新藏殿

園遊会プログラム（1931年）。(3-94)

新聞部編集室の様子。立っているのは、長く京都帝国大学新聞を支えた発行・編集人の入山(にゅうやま)雄一。(3-96)

京都帝國大學新聞

京都帝國大學新聞の使命

佐々木惣一

學術と新聞

末川博

『京都帝国大学新聞』創刊号(1925年4月15日付)。(3-97)

楽友会館(1925年竣工、森田慶一設計)。現存。(3-98)

楽友会館内で談笑する学生たち。(3-99)

京都帝国大学楽友会会員章。楽友会館利用時に携帯した。(3-100)

京大宝生会のメンバー(1932年)。能楽発表会後の記念撮影。(3-101)

京大オーケストラ定期演奏会の様子(1934年)。指揮者は京大オケの常任指揮者として多くの人材を育てたウクライナ人エマヌエル・メッテル。(3-102)

園遊会開催に際して大阪朝日新聞社長村山龍平から贈られた祝辞(1931年)。(3-95)

祝辞

學府ノ興廢ハ國家ノ隆頽ニ關ス 我カ京都帝國大學創立以來年ト共ニ盛大ヲ致シ正ニ第三十四周年ヲ迎フルニ及フ 誠ニ慶賀ニ堪ヘス 冀クハ將來イヨイヨ質實ナル學風ヲ振興シ國家ト共ニマスマス隆昌ナランコトヲ 今日記念ノ擧式ニ當リ謹ニ恭ク空中ヨリ敬意ヲ表ス

戦前期の学生生活　その日常

創立期から1910年代くらいまでの学生の服装は和服が主流であった。そして足には下駄、頭には角帽をかぶり、腰からはインク壺をぶらさげて大学に通ったという。それが時代が下るにつれ、写真に見られるように詰襟の制服姿が次第に増え、髭をたくわえた豪傑風の学生も少なくなってくる。学生たちの下宿の多くは吉田、浄土寺、北白川などの大学近辺であった。食事については、当初は吉田界隈にできた民家を改造した小食堂などでとる者も多かったが、学生数の増加もあって、本格的な学内食堂設置の要望が大きく、1931(昭和6)年には時計台北側に開設され、多数の学生で賑うようになった。

余暇の過ごし方も多様化し、1910年代頃までの史料では洛北への松茸狩りや兎狩りなどの記事が目立つが、1930年の生計調査では麻雀・撞球(ビリヤード)・ゴルフなども学生の趣味としてあげられるようになる。また、学生たちは酒もよく嗜んだ。熊野神社から百万遍まで市電が開通したのは1928年と遅く、学生たちにとっては、吉田神社―平安神宮―知恩院―円山公園と歩き、京極で飲む、というのがコースだったらしい。

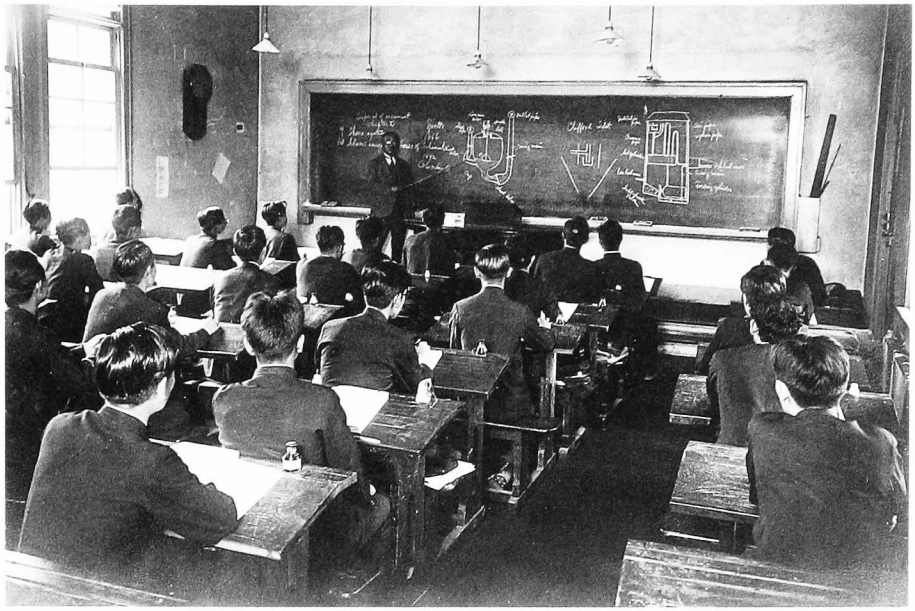
1920年代後半には日本は空前の恐慌に陥り、帝大生も就職難に悩まされることになるが、当時の『京都帝国大学新聞』には京大生との養子縁組を希望する記事が掲載されるなど、社会における京大生の特別な位置づけは基本的には変わっていなかった。

寄宿舎正面。1913年に新築された。現在の吉田寮。(3-103)

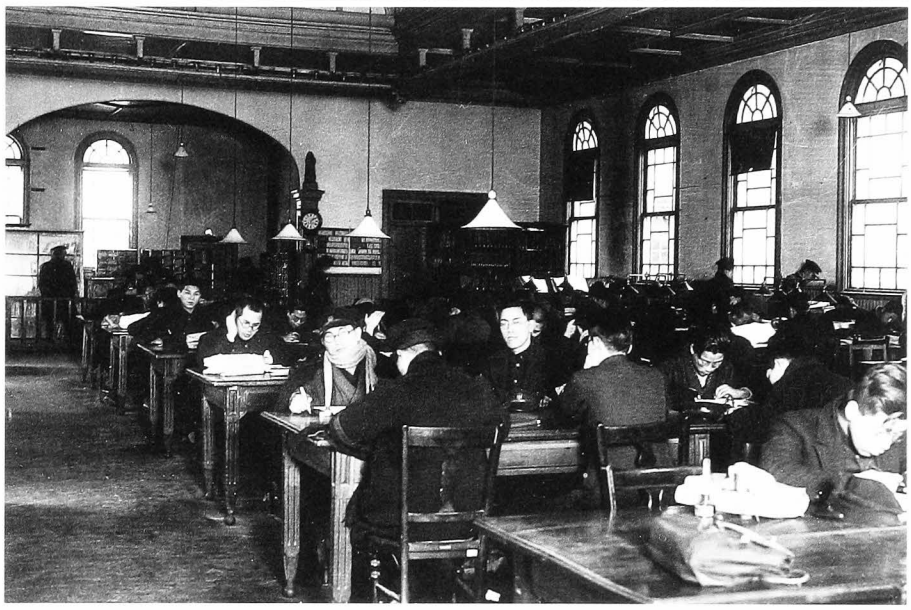
『寄宿舎誌』に掲載された「ヒゲ党」の写真。豪傑気取りの学生たちである。(3-104)

『寄宿舎誌』に掲載されたポンチ画(1906年)。当時の学生の服装がよくわかる。(3-105)

『京都帝国大学寄宿舎誌』。寄宿舎生自らが持ち寄った原稿でつくられた回覧雑誌。1906年から断続的に敗戦まで発行された。各号に個性的なタイトルが付されている。(3-106)



工学部土木工学科の授業風景(1932年ころ)。学生たちの机の上にはインク壺が置かれている。(3-107)



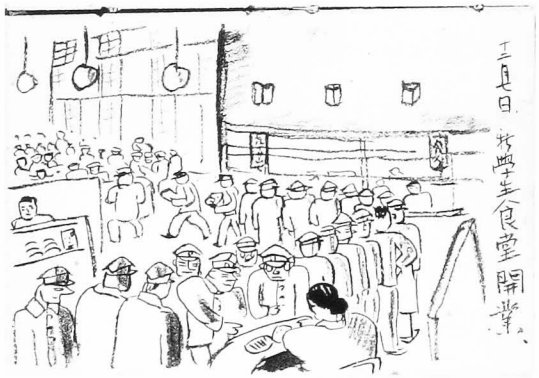
図書館で勉強する学生たちの様子(1928年ころ)。試験が近づくと図書館も学生で満員になった。(3-108)

附属医院学生控室で卓球に興じる学生たち。髭を生やした学生も多い。写真は1915年頃。(3-109)

入学宣誓式の様子(1928年)。当時は学生が1人ずつ学部長の面前で宣誓簿に署名した。写真は大学院の宣誓式。(3-110)

戦前期の学生生活　その日常

自炊制度について議論する寄宿舎生(1931年ごろ)。高等教育機関の寄宿舎の食堂は、賄いと呼ばれる外部の業者が請負っていたが、この時期次第に舎生が管理する自炊制度が取り入れられるようになってきていた。(3-111)



1931年12月に開業した学生食堂の様子(故田村雄一名誉教授の『漫画日記』より)。(3-112)

結婚紹介

大野氏へ申込め

嫁入りたし

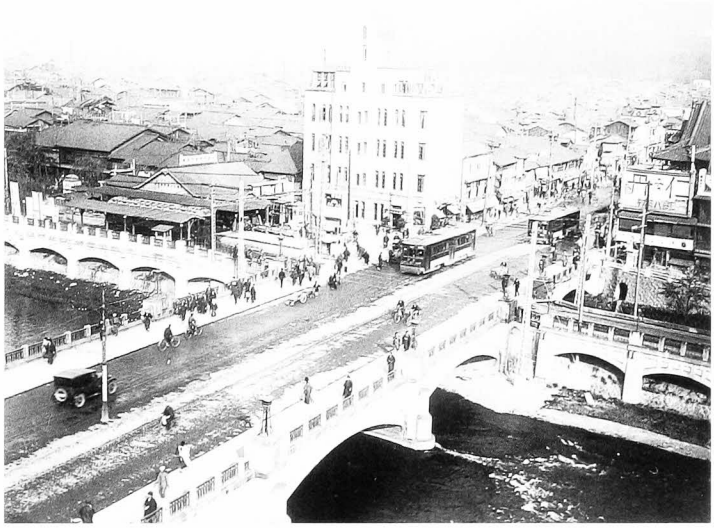
京大生への結婚紹介記事(『京都帝国大学新聞』1932年2月21日付)。(3-113)

ビリヤードに興じる学生たち(1930年ごろ)。(3-114)

ストーブの前に集まる学生。工学部土木工学科(1925年ごろ)。(3-115)

居酒屋で飲む学生たち(1930年ごろ)。(3-116)

下宿でくつろぐ学生たち(1920年代後半)。こたつの上にあるのはダイヤモンドゲームか。(3-117)



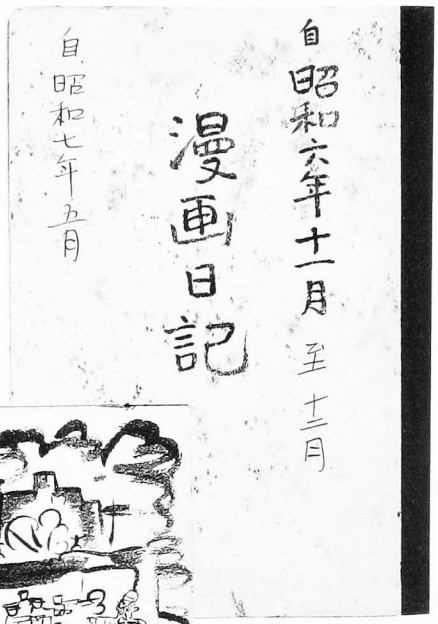
四条大橋の風景(1928年ごろ)。学生たちはこのあたりまで歩いてきて酒を飲んだ。(3-118)

囲碁を楽しむ学生たち(1930年ごろ)。(3-119)

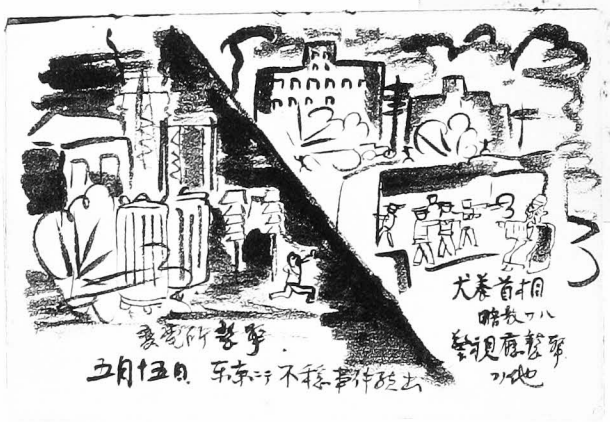
嵐山渡月橋におけるスナップ(1925年ごろ)。(3-120)

漫画日記

ここで紹介するのは、理学部地球物理学教室の故田村雄一名誉教授が若い頃に描いた『漫画日記』である。水彩画を趣味としていた田村によるこの日記では、日常の生活、大学の様子、京都の風景、社会・政治情勢などが実に生き生きと、しかも繊細に描き出されている。これらの漫画の一点一点は、写真とは違った雰囲気をもって時代の状況を語りかけてくれている。



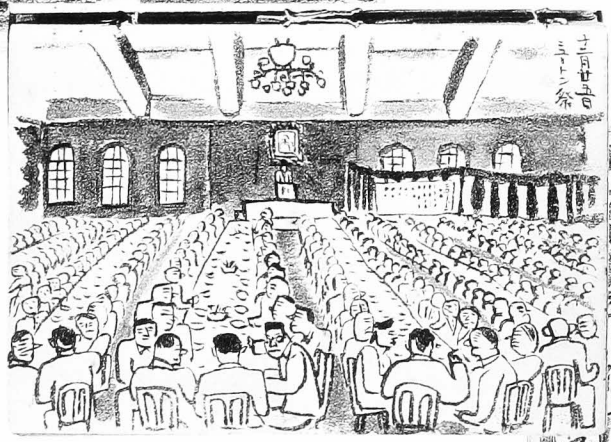
「漫画日記」の表紙。(3-121)



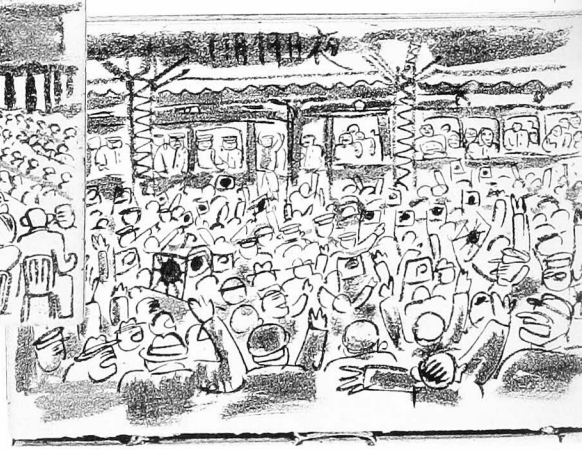
1932年の五・一五事件。「不穏事件続出」と書かれている。(3-122)

1931年9月の満州事変勃発。(3-123)

霧雨の百万遍交差点。(3-124)



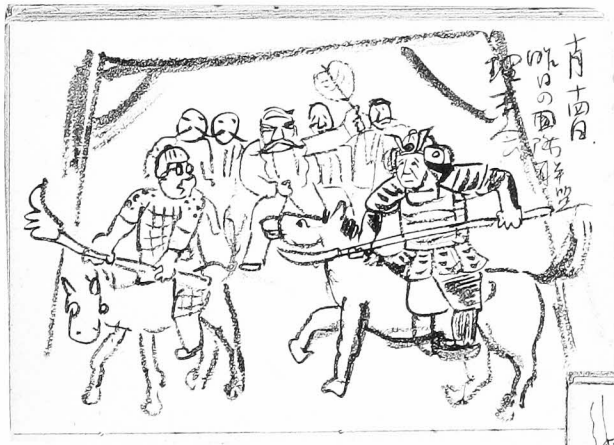
ニュートン祭の様子。理学部の数学・物理学・宇宙物理学・地球物理学教室主催で講演や余興が行われた。(3-125)



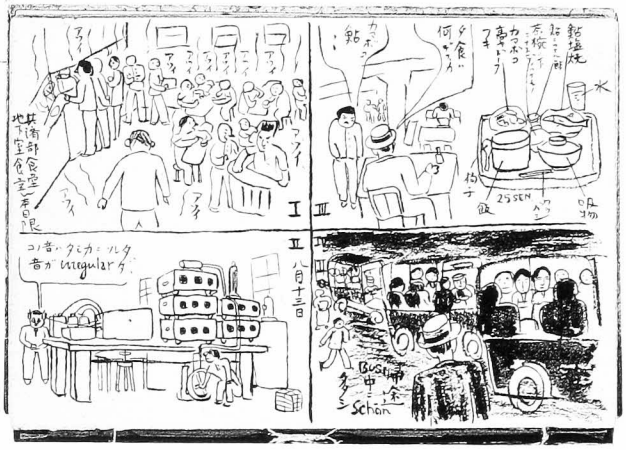
出征する兵士を駅で見送る様子。(3-126)

食堂で議論する教室のスタッフ。話題は阿蘇山爆発の可能性。(3-127)

1931年10月の国際連盟における日中対立。満州事変をめぐり両国は厳しく対立、1年半後に日本は連盟を脱退する。右が日本、左が中国か。(3-128)

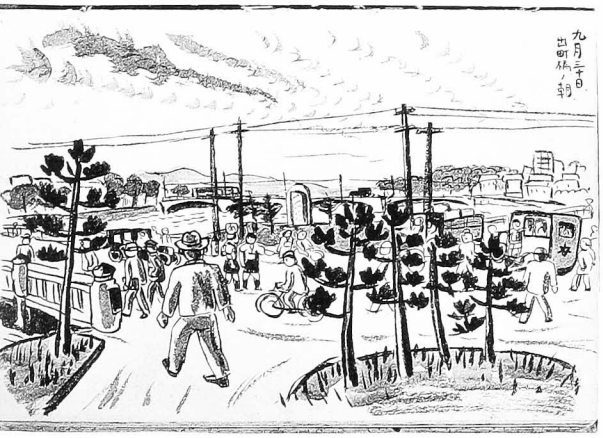


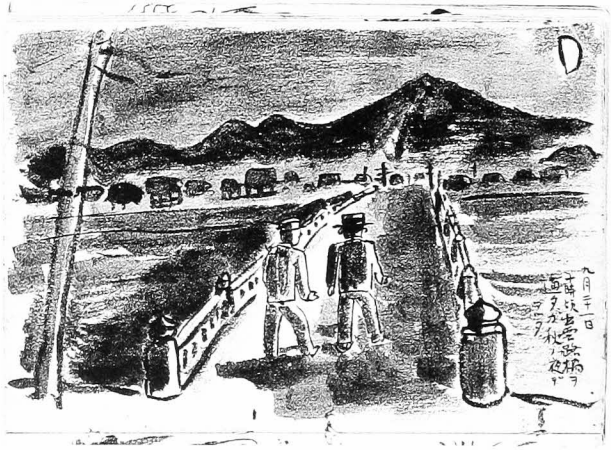
教室スタッフの夏休み。なかなか多彩である。(3-129)



ある夏の1日。(3-130)

出町橋の朝。賀茂川の流れも見える。(3-131)





出雲路橋の夜。正面に比叡山。(3-133)

大学の夏。午前の夏期講習会による賑いと午後の静寂が対照的。(3-132)

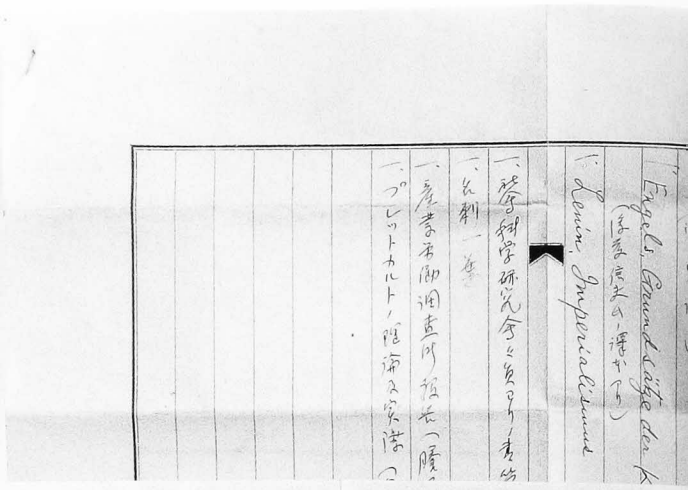
学問・思想への弾圧

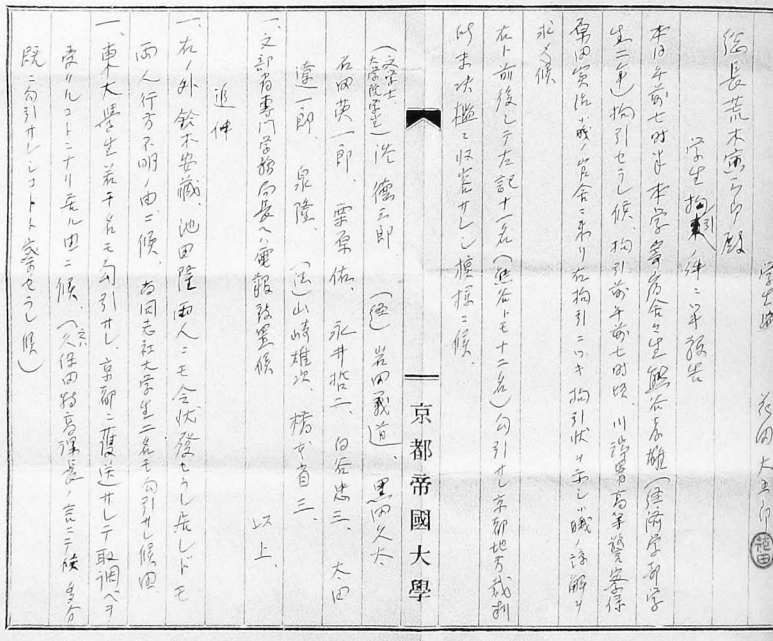
第一次世界大戦後、社会主義思想が知識人・学生らに次第に広がるが、それに比例して当局側の統制・弾圧も強まっていくことになる。

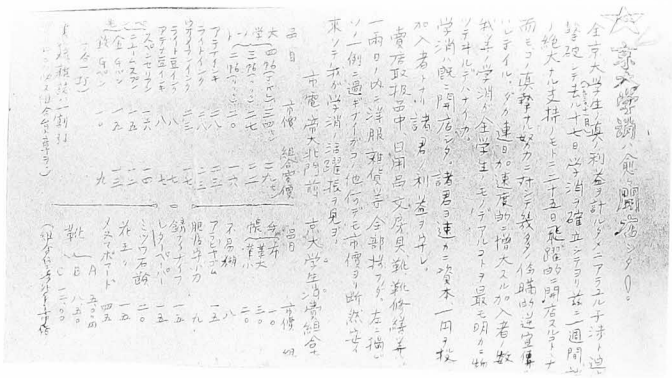
京大では1923（大正12）年に社会科学研究会（以下社研）が結成された。社研は全国的な学生連合会に加盟し、プロレタリア社会科学に関する研究にとどまらず、無産者教育協会を結成するなど、むしろその社会への普及に力をいれようとした。1925年12月、軍事教育反対運動を契機として警察は京大・同志社大の社研学生を検束、大学側の抗議もあって一旦釈放となったが、翌年1月に京大生12人らを再び検挙した。これは京都学連事件とよばれ、1925年公布の治安維持法の最初の適用事件となった。

学連事件によって社研には指導教官が置かれることになり、経済学部教授河上肇が就任した。河上はマルクス主義者としてすでに名高く、その真摯な学問への姿勢と率直な人柄で多くの学生たちに支持されていた。1928年3月、三・一五事件と呼ばれる共産党員の一斉検挙によって京大社研の学生が検束されると、文部省は総長に河上の休職処分を要求してきた。結局経済学部教授会も河上の辞職に同意し、4月河上は辞表を提出したが、これは事実上大学教授が研究の内容によって職を追われた事件であり、学問研究の自由、大学の自治の観点から見て大きな転換点となるものであった。

河上肇（1879〜1946）。京大退職後実践運動に投じ、4年間獄中にあった。（3-134）

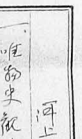






「学消ニュース」第1号（1930年11月）。1930年、学生の生活擁護を目的に学生消費組合（学消）が結成され一時は1,300人の組合員を数えたが、その活動が政治的として大学から解散命令をうけ、翌31年解散した。（3-136）

学外にあった京大学生消費組合の店。（3-137）



河上教授宅ヲ列上ゲシ書類（大正十五年一月十五日）

一、唯物史観ノ研究（河上肇著）

（京都帝国大学教授）

一、Marx, Engels, Lafargue und Co.（大原）

学連事件に関する花田大五郎学生監から荒木総長宛報告（1926年1月15日）。学生の検挙、河上教授宅の捜索について報告されている。(3-135)

大學を辭するに臨みて

河上肇

京大其他の社會科學研究會員

全國一齊の大檢擧

本年一月十四日から四月十三日に亘る三回に

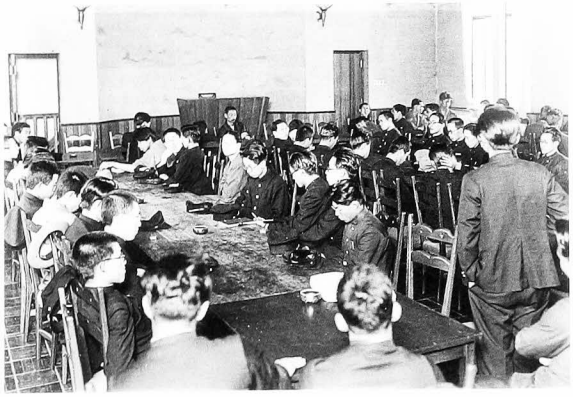
治安維持法出版法違反として

半ケ年以上の取調べて漸く結審：記事昨日解禁

京大同大學生 十四名拘引

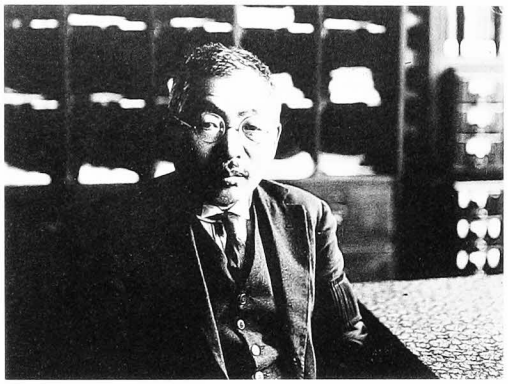
石田男、淡文學士等

学連事件を報じる新聞記事（『京都日出新聞』1926年9月16日付）。当初は事件の報道は差し止められており、9月15日の解禁とともに各紙一斉に報じた。(3-138)



河上の送別謝恩会の様子（1928年5月）。学生有志の主催で楽友会館で開かれた。中央奥に河上の姿が見える。出席者たちは、謝恩会終了後河上を自宅まで送り、門前で博士万歳を唱えたという。(3-139)

河上の「大学を辞するに臨みて」（『京都帝国大学新聞』1928年3月21日付）。河上は自らの辞職の事情を記し、公開した。(3-140)



佐々木惣一（1878〜1965）。法学部教授団の中心的存在だった。（3-141）

滝川幸辰（1891〜1962）。事件で辞職後弁護士を開業したが、戦後京大に復帰し法学部長、ついで総長をつとめた。（3-142）

滝川事件

1933（昭和８）年の滝川事件の発端は、前年に法学部の滝川幸辰（ゆきとき）教授が中央大学で行った講演と、滝川の著書『刑法読本』が、司法省や帝国議会で問題視されたことであった。文部省（鳩山一郎文相）は滝川の休職を要求してきたが、法学部教授会は大学の自治に反するものとしてこれを拒否し、５月26日の処分発令とともに全教官が辞表を提出するなど、両者は激しく対立した。その後いくつか妥協策も模索されたが、滝川の処分は撤回されることなく、結局法学部の33人の専任教官のうち21人が京大を去ることになった（翌年までに７人復職）。

事件の期間を通じて、学生たちは法学部支持の行動をとっていたが、他学部教官や他大学からの組織的な支援は一切なく、法学部教授団の戦いは孤立したものであった。教授団は、滝川の処分を阻止できなかったことに加え、「辞職組」と「残留組」とに分裂するという二重の痛手を受けることになったのである。

法学部が滝川事件で問題にしたのは、滝川個人の学説の当否や身分の保障だけではなく、大学における学問研究の自由とは何か、国家と大学との関係をどう考えるのか、という近代日本の大学の本質にかかわる問題であった。滝川事件は、日本の学問・文化・社会のあり方が戦時体制へと大きく踏み出す契機となったといえよう。

中央大学における講演会の記念写真。前列右から３人目が滝川、その左隣は林頼三郎検事総長。（3-143）

菊花と共に咲いた學の華

斯界の三傑を聘して

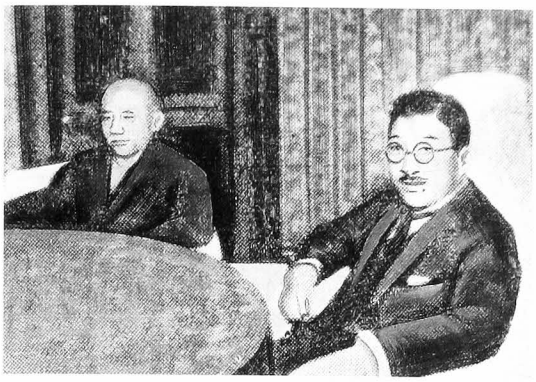
刑法學大講演會

—小野、滝川、草野三教授—

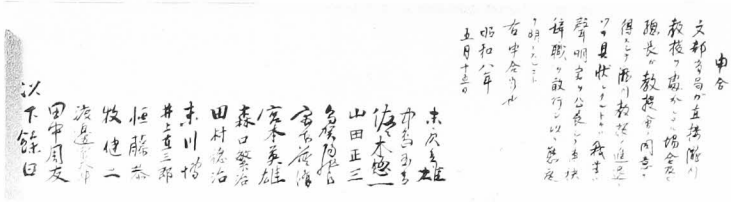
就職座談會

1932年10月に中央大学で行われた滝川幸辰の刑法学講演会（『中央大学新聞』1932年11月15日付）。（3-144）

『刑法読本』初版本（1932年刊）。（3-145）



滝川事件の解決のため会談する小西重直総長（左）と鳩山一郎文部大臣（右）（『京都日出新聞』1933年5月25日付）。(3-146)



法学部教授団の申合書。自らの主張が認められなかった場合の連袂辞職を申し合わせている。(3-147)

法学部教官総辞職を伝える新聞記事。(3-148)

京都日出新聞（昭和八年三月二十七日）

研究の自由は

大學令の範圍内だ

文部省、各大學に厳達に決定

教授も秀才第一主義を廢し

採用方針大改革

辭表一括總長へ

淋しくもほゝゑむ教授ら

面上に安堵の色浮ぶ

學生代表けふ東上

鳩山文相に決議手交

法學部教授

絶對支持を決議

辭表提出教授に

一應反省を促す

再選の場合は認可

悲痛！師恩と涙の決別

會大生學部學法大京のふのき

緊張と昂奮の極致

物凄くも滿場を壓す

言々句々火を吐き

文部省の不法糾彈

寫眞說明

岩波茂雄より佐々木惣一宛書翰。岩波は滝川事件に強い関心をもっており、「法学部の微動もせず所信に一貫せる態度に衷心より敬意を表し」ていた。(3-149)

戦時体制期の大学　研究所の新設

1930年代後半から40年代にかけて、京大ではいくつかの研究所や学科・講座等が新設されるが、これは当時全国の大学で国策に応じてとられた拡大策の一環でもあった。

まず1939（昭和14）年８月に人文科学研究所（以下人文研）が設置された。人文研は官制に「国家ニ須要ナル東亜ニ関スル人文科学ノ綜合研究ヲ掌ル」とうたい、学部の枠をこえた所員たちによる研究活動の舞台となった。

また、1941年３月には結核研究所（現：胸部疾患研究所）が設置された。結核研は当時国民病といわれた結核の予防および治療についての研究を目的としていたが、設置の背景には軍部を中心とした戦時下の人的資源確保の要求があった。

続いて同年11月に工学研究所が設置された。工学研究所の前身は1914年に工科大学に置かれた中央実験所であり、この時に独立した機関となったものである。工学部の各分科相互に関係するような課題についての研究や学外からの受託研究などを行った。

さらに1944年５月には木材研究所（現：木質科学研究所）が設置され、資源としての木材の利用についての研究が行われることになった。

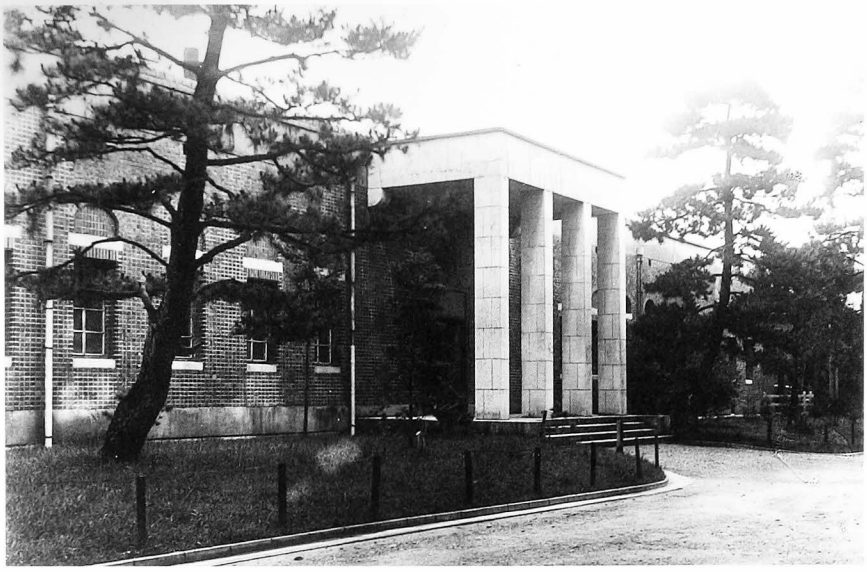
このほか、1939年３月には後に薬学部として独立する医学部薬学科が、同年５月には軍医養成機関として臨時附属医学専門部（1952年廃校）も設置された。

人文科学研究所設置を伝える新聞記事。（『京都日出新聞』1939年２月25日付）。(3-150)

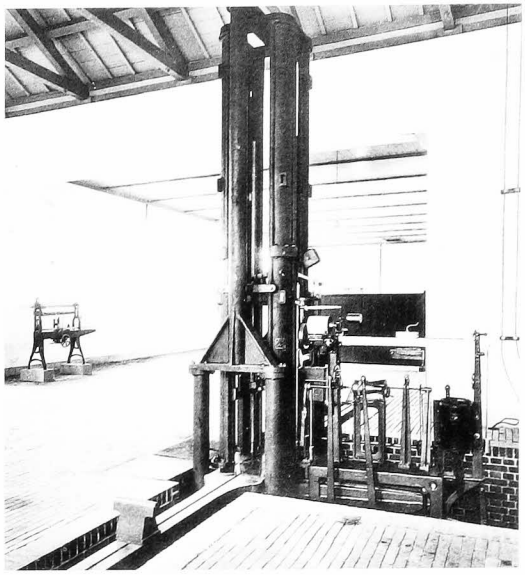
京大が全國に魁けて
育てる興亞の若き頭脳
人文科學研究所を設置

設置当初の人文科学研究所。当初は本部構内の附属図書館北側に置かれた。(3-151)

設立当時の結核研究所。当初は医学部附属医院構内の建物を応急的に使用した。(3-152)



工学研究所正面。(3-153)



中央実験所時代の建物内部。(3-154)

木材研究所設置を伝える『官報』(1944年5月20日付)。すでに敗色濃くなった時期の設置であった。(3-155)

官報

昭和十九年五月二十日
第五千二百二號 土曜日

勅令

朕木材研究所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

昭和十九年五月十九日

内閣總理大臣　東條英機
文部大臣子爵岡部長景

勅令第三百五十四號

木材研究所官制

第一條　木材研究所ハ木材ニ關スル學理及其ノ應用ノ研究ヲ掌ル

第二條　木材研究所ハ京都帝國大學及九州帝國大學ニ附置シ當該帝國大學ノ名ヲ冠ス

第三條　木材研究所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長
所員
助手
書記

第四條　所長ハ當該帝國大學ノ教授ノ中ヨリ文部大臣之ヲ補ス

所長ハ當該帝國大學ノ總長ノ監督ノ下ニ於テ木材研究所ノ事務ヲ掌理ス

第五條　所員ハ帝國大學ノ教授及助教授ノ中ヨリ文部大臣之ヲ補ス

所員ハ所長ノ監督ノ下ニ於テ研究ヲ掌ル

第六條　助手ハ各木材研究所ニ付專任六人判任トス上司ノ指揮ヲ承ケ研究ニ從事ス

第七條　書記ハ各木材研究所ニ付專任二人判任トス上司ノ指揮ヲ承ケ事務ニ從事ス

第八條　帝國大學教授ニシテ所長又ハ所員ニ補セラレタルモノニハ講座ヲ擔任セシメザルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ講座ヲ擔任セシメザル教授及所員ニ補セラレ專ラ所務ニ從事スル助教授ハ各木材研究所ニ付通ジテ六人トシ所屬帝國大學ノ定員外トス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

帝國大學高等官等俸給令中左ノ通改正ス

第三條中「又ハ南方自然科學研究所長」ヲ「南方自然科學研究所長又ハ木材研究所長」ニ改ム

第四條ノ二及第六條ノ二中「又ハ南方自然科學研究所員」ヲ「南方自然科學研究所員又ハ木材研究所員」ニ改ム

臨時附属医学専門部第8回卒業生の石碑。医学部構内に現存。(3-156)

設立当時の医学部薬学科の建物。(3-157)

戦時体制期の大学　儀式・式典

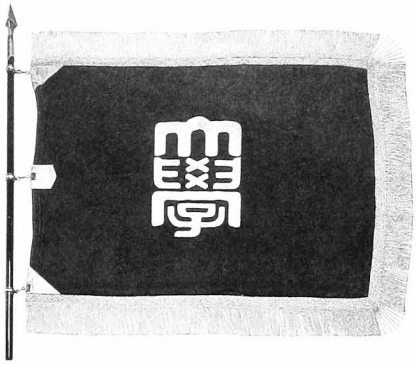
戦前期の帝国大学においては儀式・式典は重要な意味を持っていたが、戦時期には戦意高揚、一体感の強化という目的も加わって、その重要性は一層増すことになる。

1940（昭和15）年1月学旗および学歌が制定された。これは前年の「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」の趣旨に応える方法として計画されたもので、学旗の意匠と学歌の歌詞は応募作品のなかから選定されたものであった。

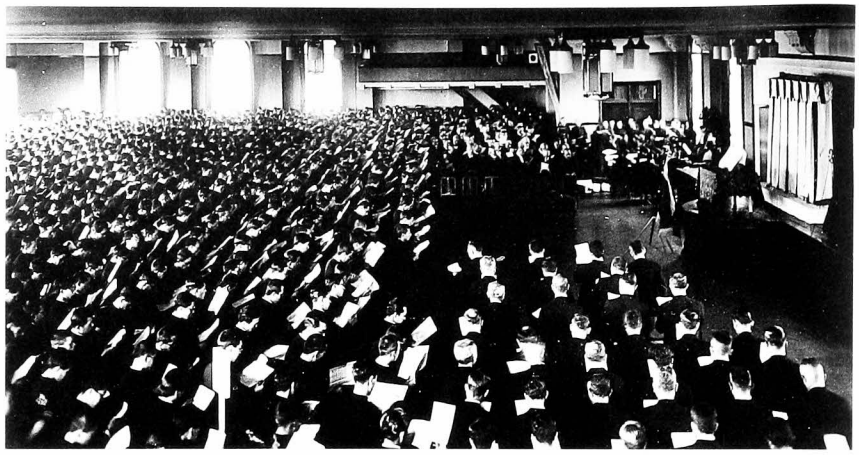
同じ1940年には紀元二千六百年祝賀の式典が京大でも行われることになり、学内の一般公開や講演会などが催され、さらに京大最初の沿革史である『京都帝国大学史』も刊行された。

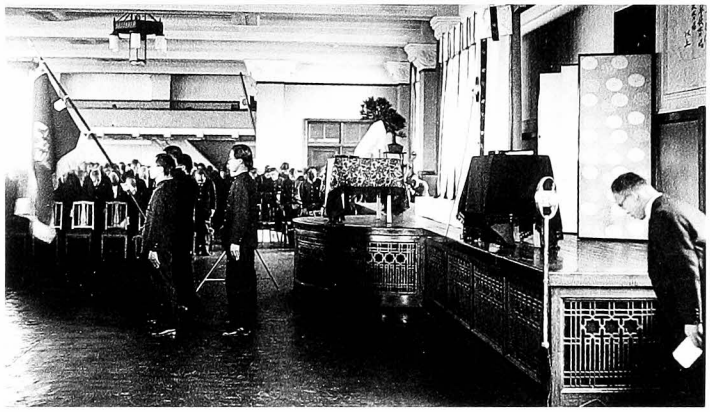
また、戦争に直接関係する儀式・式典についても、南京や漢口陥落、対英米宣戦布告といった戦争の節目には教職員、学生が時計台前に集合して祝賀式が行われ、他にも戦没者の慰霊祭や後述の出陣学徒壮行式など、数多く催された。

社会全体が戦時色を次第に濃くするなか、京大もその例外ではなく、戦時体制に組み込まれていったのである。



制定された学旗。(3-158)





時計台2階大ホールで行われた学旗学歌制定式の様子（1940年2月11日）。(3-159) (3-160)

京都帝國大學學歌

九重に　花ぞ匂へる
千年の　京に在りて
その土を　朝踏みしめ
その空を　夕仰げば
青雲は　極みはるかに
われらの　まなこをむかへ
照る日は　ひかり直さし
われらの　ことばにうつる

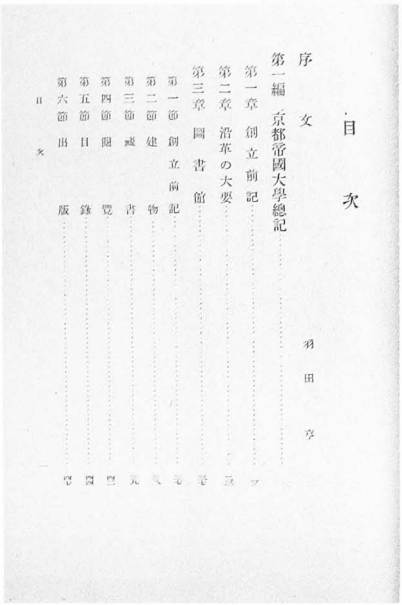
緑吹く　楢の葉風に
時の鐘　繼ぎて響けば
人の世に　まこと建つべく
現身に　まこと立つべく
たまきはる　命をこめて
いしずゑ　堅く築かん
伸びゆく　強き力の
日出づる　國の子我等

水下　作詞
梨本總一　作曲
瀬戸皓久

京都帝国大学学歌の歌詞とレコード。(3-161)

紀元二千六百年記念植樹を記した石碑。(3-162)

『京都帝国大学史』。1943年に刊行された。(3-163)



京都帝國大學史

目次

序文　羽田亨

第一編　京都帝國大學總記

第一章　創立前記

第二章　沿革の大要

第三章　圖書館

第一節　創立前記

第二節　建物

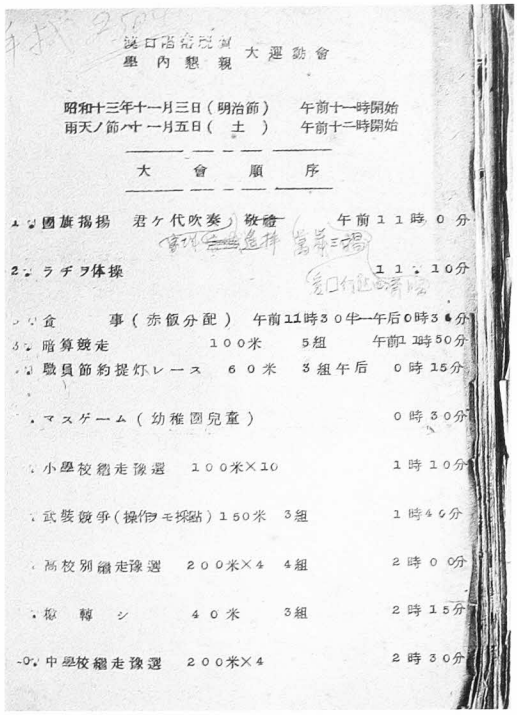
第三節　藏書

第四節　閲覧

第五節　目錄

第六節　出版

1938年に行われた運動会のプログラム。「漢口陥落祝賀」と銘打たれた。(3-164)



漢口陥落祝賀
學内懇親　大運動會

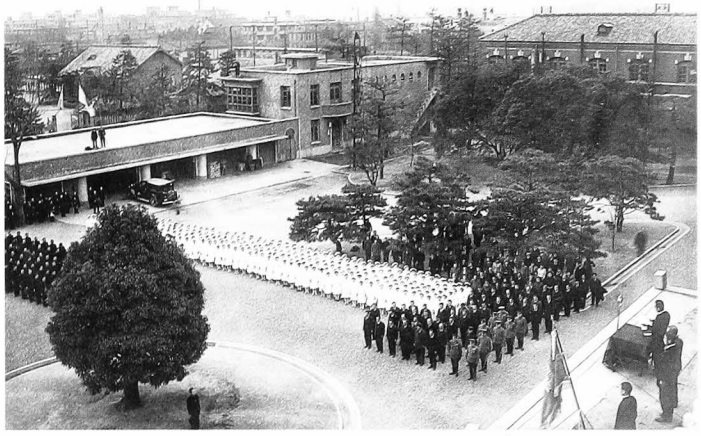
昭和十三年十一月三日（明治節）　午前十一時開始
雨天ノ節ハ十一月五日（土）　午前十二時開始

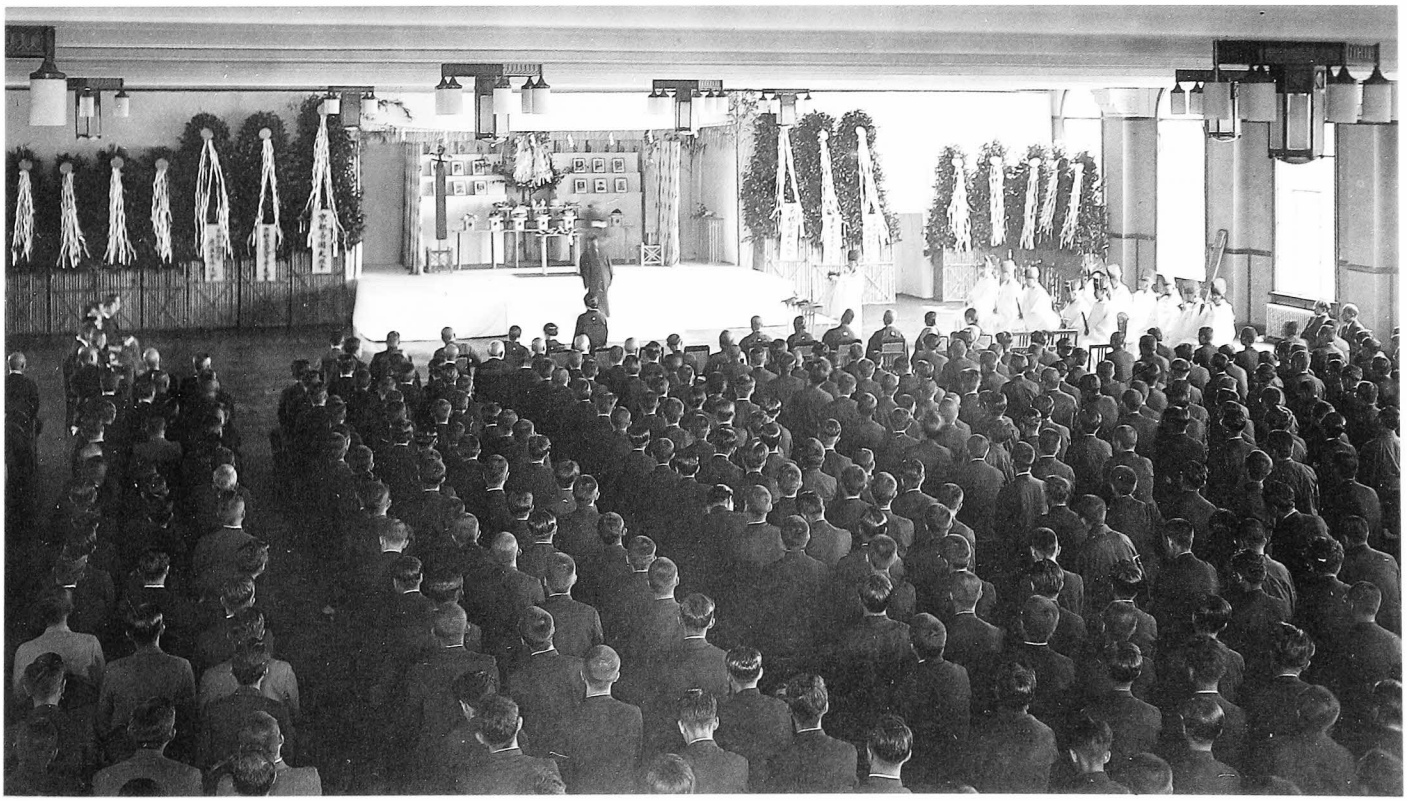
大會順序

1. 國旗揭揚　君ケ代吹奏　敬禮　午前11時0分
2. ラヂヲ体操　11：10分
3. 貪　事（赤假分配）　午前11時30分—午后0時36分
4. 暗算競走　100米　5組　午前10時50分
5. 職員節約提灯レース　60米　3組　午后0時15分
6. マスゲーム（幼稚園兒童）　0時30分
7. 小學校總走豫選　100米×10　1時10分
8. 武裝競爭（操作ヲモ採點）150米　3組　1時40分
9. 高校別總走豫選　200米×4　4組　2時00分
10. 棒轉シ　40米　3組　2時15分
11. 中學校總走豫選　200米×4　2時30分

時計台前広場で行われた南京陥落祝賀式の様子(1937年12月)。同様の行事がこの後繰り返し催された。(3-165)

シンガポール陥落祝賀式の様子(1942年2月)。挨拶しているのは羽田亨総長。(3-166)





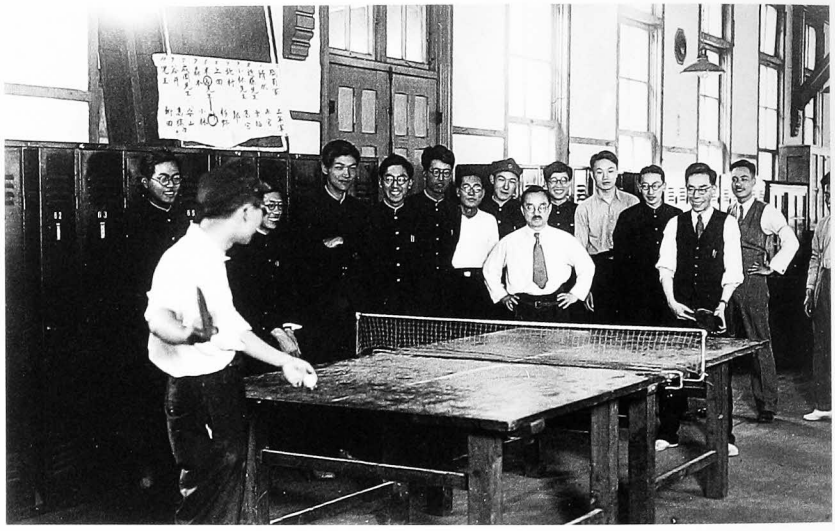
時計台2階大ホールで行われた戦没者慰霊祭の様子(1939年10月)。(3-167)

戦時期の学生生活

1930年代後半になると教育機関に対する国家の統制は非常に強化されていく。しかし、そうしたなかでも、京大では滝川事件の免官教授が講演に訪れたり、図書館で発禁の書物が読めたりするなど、帝国大学の学生たちは、社会から一種の隔離状態にあって、しばらくはわずかに自由を味わえる立場にあったといえよう。

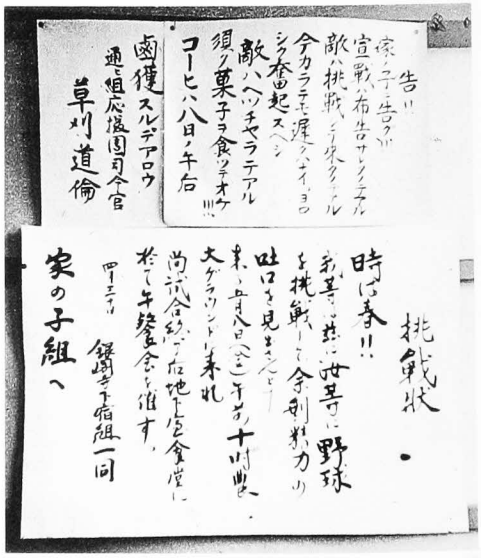
だが、前項でも述べたように、日中戦争が長期化し、社会全体が戦時色に包まれるにつれ、学生生活も少しずつ変化していった。1939（昭和14）年には従来は随意科目だった軍事教練が必修となった。軍事教練は出席が厳密にとられ、しかもその評点が入営後の処遇にかかわっており、学生たちにとっては厳しい授業であった。また同じ頃から学生の勤労動員も始まった。当初は自由参加の形式をとっていた勤労動員も、戦局が深刻化してくると強制的なものになり、1943年以降は学生たちは大学を離れて軍需工場で生産に携わったり、農村で土地改良に取り組むようになった。戦争末期になると、これらの作業は終日、しかも長期間にわたるようになり、後述の学徒出陣と合わせ、大学は教育機関としての役割をほとんど果しえない状態で敗戦を迎えることになった。

学生たちの食事風景。(3-168)



「職員軍」対「三年軍」の卓球大会。(3-169)

「下宿組」から「家の子組」への野球の挑戦状。(3-170)



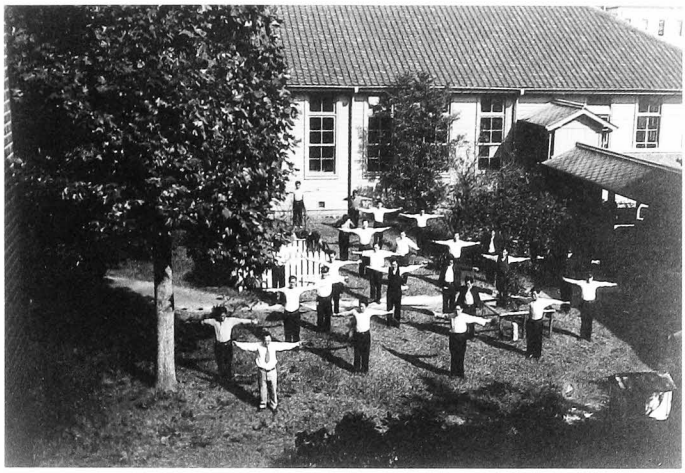
挑戦状

時は春!!
我等は遂に世界に野球を挑戦して今朝勝力の吐口を見ました
来る廿八日(土)午前十時農大グラウンドに来れ
尚試合終了後地下食堂にて午餐会を催す
四月二十日　経済学部下宿組一同
実の子組へ

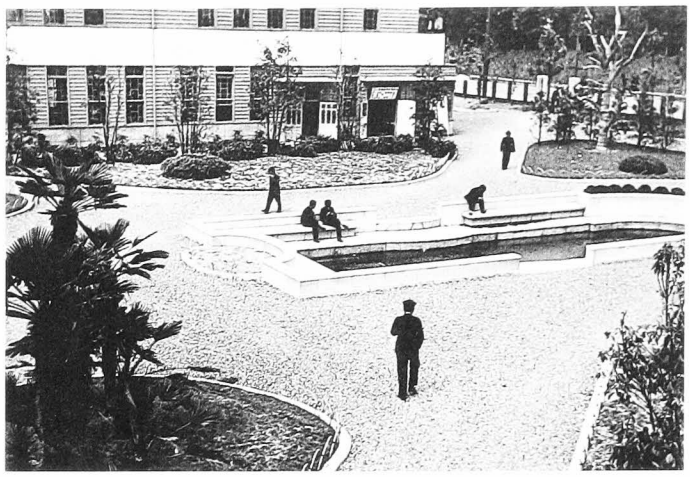
家の子告ぐ
宣戦布告サレタル敵ハ挑戦ニ応ズルベク今カラモ遅クナイヨウシ奮起スベシ
敵ハヘッチャラテアル須ク菓子ヲ食ッテオケ!!!
コーヒ八日ノ午后
鹵獲スルデアロウ
通俗応援団司令官
草刈道倫

農学部グラウンドでの野球の様子。(3-171)

ラジオ体操の様子（工学部土木工学教室中庭）。(3-172)



西部構内の風景。西部構内は1929年に京都高等工芸学校（現在の京都工芸繊維大学の前身）が松ケ崎に移転したのち京大の敷地に編入され、武道場や学生控所など学生関係の施設がつくられた。(3-173)



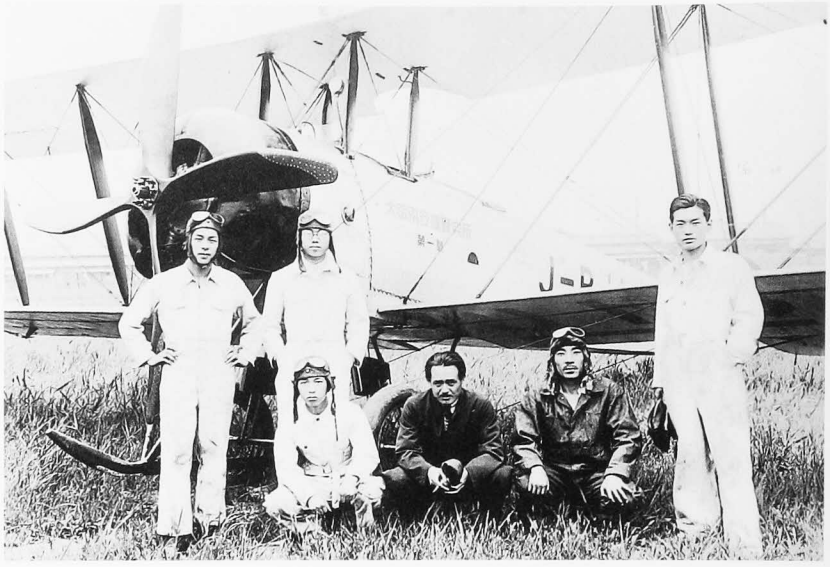
東一条交差点付近で語らう学生たち。後方左側は独逸文化研究所、右側は関西日仏学館（現存）。(3-174)

松竹劇場の前を歩く学生たち。(3-175)

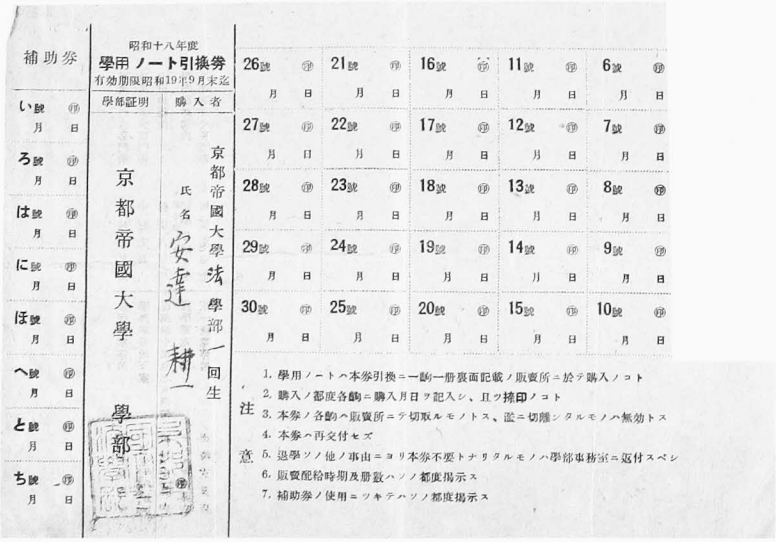
洋風の酒場で酒を飲む学生たち。1943年頃でもまだこのような光景が見られた。(3-176)

戦時期の学生生活

飛行機の前で記念撮影する工学部機械工学教室の学生たち。(3-177)



防空演習の様子。足にはゲートルが巻かれている(1943年ごろ)。(3-178)



補助券

昭和十八年度
學用 ノート引換券
有効期限昭和19年9月末迄

學部証明　京都帝國大學學部

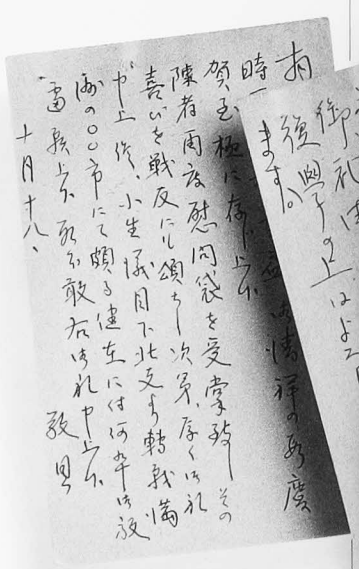
購入者　京都帝國大學法學部一回生　氏名 安達耕一

い號 月 日　ろ號 月 日　は號 月 日　に號 月 日　ほ號 月 日　へ號 月 日　と號 月 日　ち號 月 日

26號 月 日　21號 月 日　16號 月 日　11號 月 日　6號 月 日
27號 月 日　22號 月 日　17號 月 日　12號 月 日　7號 月 日
28號 月 日　23號 月 日　18號 月 日　13號 月 日　8號 月 日
29號 月 日　24號 月 日　19號 月 日　14號 月 日　9號 月 日
30號 月 日　25號 月 日　20號 月 日　15號 月 日　10號 月 日

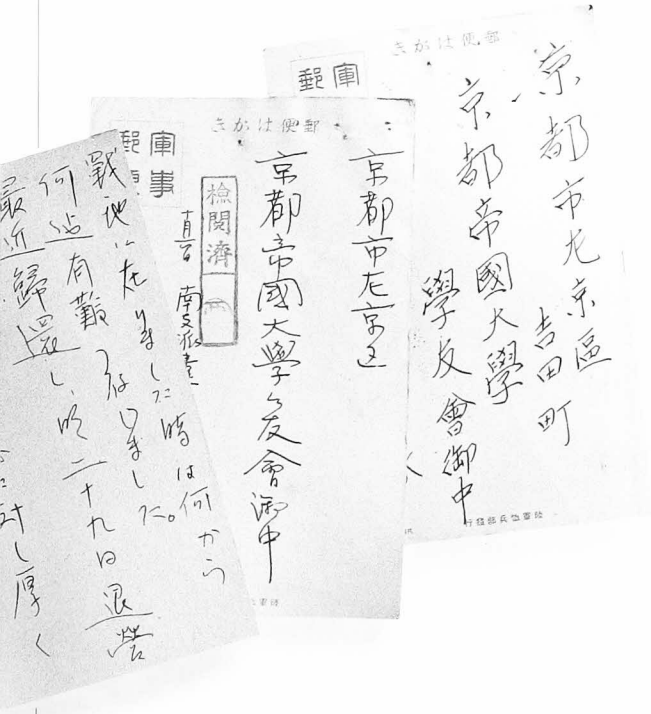
注意
1. 學用ノートハ本券引換ニ一冊一冊裏面記載ノ販賣所ニ於テ購入ノコト
2. 購入ノ都度各冊ニ購入月日ヲ記入シ、且ツ捺印ノコト
3. 本券ノ各冊ハ販賣所ニテ切取ルモノトス、誤ニ切離シタルモノハ無効トス
4. 本券ハ再交付セズ
5. 退學ソノ他ノ事由ニヨリ本券不要トナリタルモノハ學部事務室ニ返付スベシ
6. 販賣配給時期及冊數ハソノ都度掲示ス
7. 補助券ノ使用ニツキテハソノ都度掲示ス

学用ノート引換券。物が不足するようになり、学生たちに配付された。(3-179)

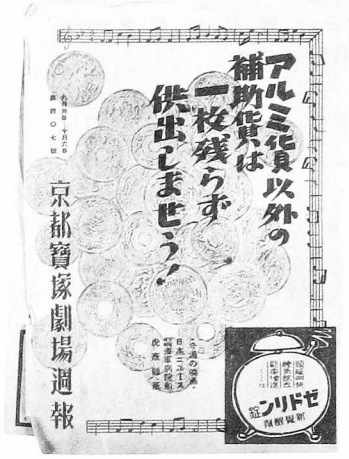


農学部グラウンドにおける学生軍事教練の様子(1943年ごろ)。(3-180)

東京第二陸軍兵廠宇治製造所における勤労動員の解散記念写真。文系3学部から動員された。(3-181)



出征兵士からの葉書。学友会から送られた慰問袋への礼状。(3-182)



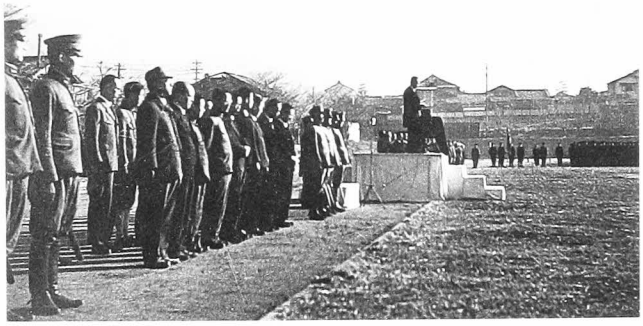
1943年頃の映画・劇場のパンフレット。(3-183)

学徒出陣

1943（昭和18）年10月に在学徴集延期臨時特例が公布され、従来高等教育機関在学者に認められていた徴集延期措置が文系学部を中心に廃止となり、満20歳以上（翌年から19歳に変更）の学生は12月から陸海軍に入営することになった。これがいわゆる学徒出陣である。すでに1941年以来大学の修学年限が短縮されるようになっていて、卒業を繰り上げられた学生たちは次々と徴集されていったが、ついに在学中の学生にも及ぶようになった。

徴集延期の廃止決定から入営までのわずか２カ月、学生たちは臨時徴兵検査や、講演会などの大学主催の記念行事で慌ただしい日々を過ごしたが、そのようななかでも読書や旅行など残された時間を有効に送った学生が多かったという。

全学の出陣学徒壮行式は11月20日に農学部グラウンドで挙行された。この時に徴兵された学生は、文法経３学部学生の８割近くに農学部の一部を加え、2,000人以上に達したといわれている。彼らのなかには特攻隊などに配属されて戦死した者も多く、また幸いに戦後復学できた者にとっても、学徒出陣の体験はその後の人生に深い刻印を残すものとなったのである。



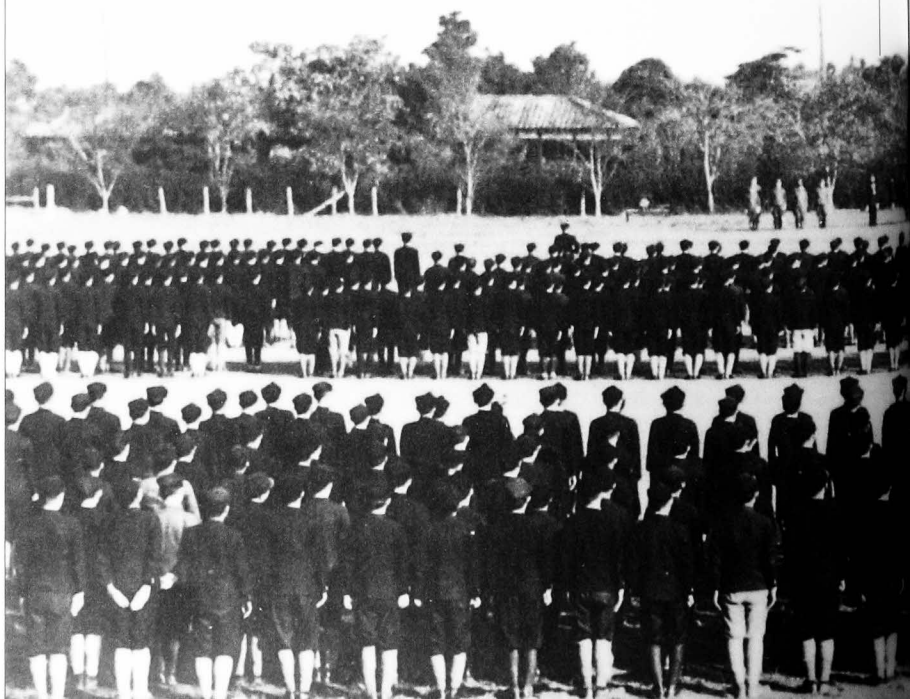
出陣学徒壮行式で挨拶する羽田亨総長。(3-184)

眼裏ニ御カム　限リ無キ慈父ノ御恩ト盡クルナキ友愛
トハ幾多感激追懐ト共ニ脈々トシテ常ニ無言ノ激勵
タルベク、我等亦、學恩ノ報謝ノ中ニ、嚴タル學府ノ隆昌ヲ
壽ガム、
希クハ、諸先生、彌御健勝ニ在シテ國家ノ柱石ニ任
シ給ハムコトヲ、學友諸兄亦
ノ朝ニ、淬礪以テ精進ノ結
テトムコトヲ祈ル、
我等、今ヤ大日本帝國
聖慮ヲ安ジ奉ル、即チ生
戮シ、從容トシテ悠久ノ大
昭和十八年十一月二十日
京都帝國大學出陣學生代表
法學部三回生　吉村敏夫

丹心報國
羽田亨

応召者慰問用に大学から発送された絵葉書「丹心報国」。(3-185)

11月20日の出陣学徒壮行式の様子。(3-189)



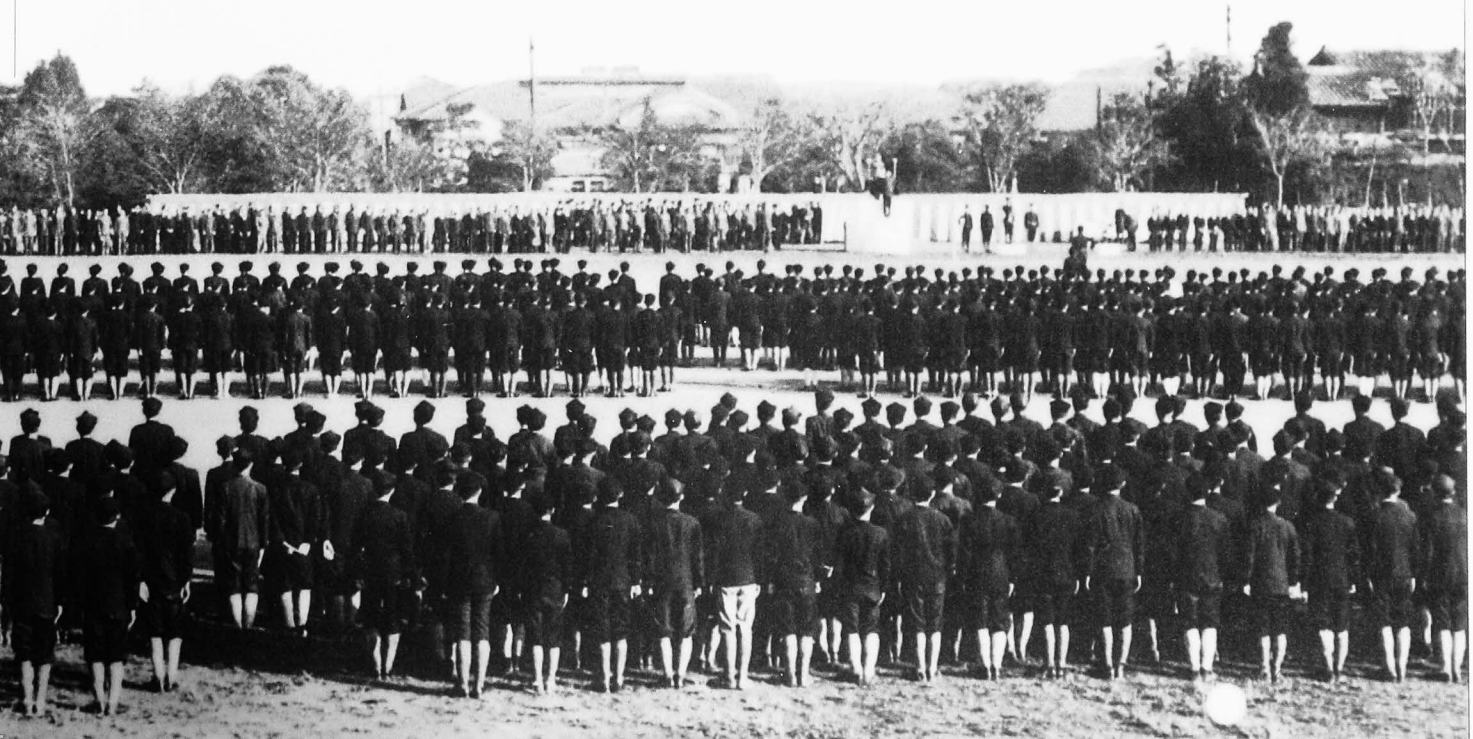
出陣学徒壮行式における出陣学生代表の答辞。(3-186)

答辞

本日茲ニ我等出陣學生ノ為ニ全學ヲ擧ゲテ嚴粛
ナル壯行ノ式ヲ擧行セラレ總長閣下ヨリ御
御訓示ヲ賜リ、殘留學生代表ヨリ、切々タル壯
贈ラル、生等ノ感激、正ニ茲ニ極ル
想フニ、米英破碎ノ大詔渙發セラレテ二ヶ年、
戰果、隨處ニ擧レルアリト雖モ、有史以來ノ、廣大
ニ、彼我ノ戰鬪ハ日ヲ逐ウテ苛烈ノ度ヲ加ヘ、皇
決セラレムトスル、重大時局ニ當面スルニ至ル、
生等「とこしへに民安かれと祈」リ給フ大御
ルコト、二十幾星霜、聖師ノ發進ト共ニ、外敵撃
鬱勃トシテ、脾肉ノ嘆ヲカコチ來レリ、今ニシテ畏
出陣ノ大命ヲ拝ス、即チ茲ニ勇躍銃ヲ執テ、第一
タムトス　男子ノ本懐實ニ之ニ過グルモノナシ、
大御稜威ノ下、大東亜共榮ノ基礎漸ク定リ、大
議ノ結果ニ依リテ、世界史ハ燦タル不滅ノ一齣
次グ南海ノ大戰果ニ、皇軍ノ威武彌々昂ラ
我等今擧ツテ征途ニ就ク、欣ビ實ニ筆舌ニ絶
正ニ人力ノ限リヲ盡シ、「義は山嶽よりも重く、死は鴻
輕し」と覺悟せ」ト宣ヘル大御心ニ生キム、我等
生還ヲ期セズ、我等ノ幸、夫レ極レリト云ハムカ、
秋天廣闊、比叡ノ秀峰ヲ仰ギツヽ、生等今
ヨリ征途ニ上ル、身ハヤガテ、邊境絶域、將又蒼溟

時計台2階大ホールで行われた法学部有信会主催の出陣学徒壮行大晩餐会。(3-187)

壮行式後分列行進で正門を出る出陣学徒。このあと平安神宮で戦勝祈願を行った。(3-188)

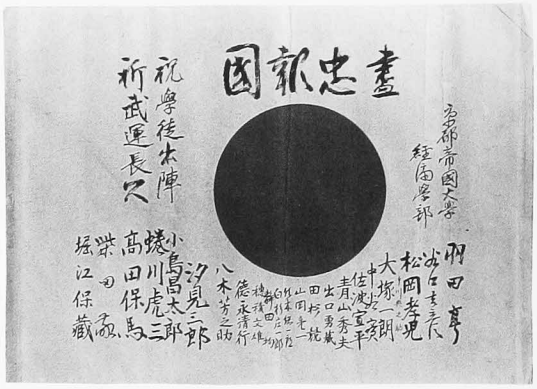


学徒兵の遺品

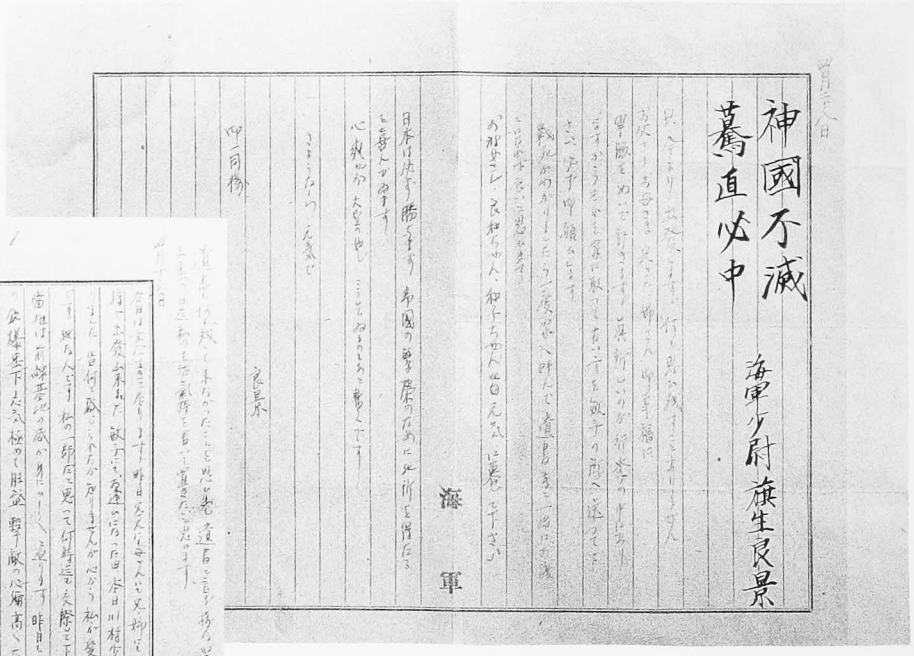
ここに紹介するのは、京大出身の学徒兵旗生良景の遺品である。旗生は福岡高校を卒業して1942年10月に経済学部に入学、わずか1年後にいわゆる学徒出陣で海軍に入隊した。1945年4月28日、神風特別攻撃隊八幡神忠隊員として鹿児島県串良基地から出撃、南西方面で戦死した。22歳。

経済学部時代の旗生良景。(3-190)

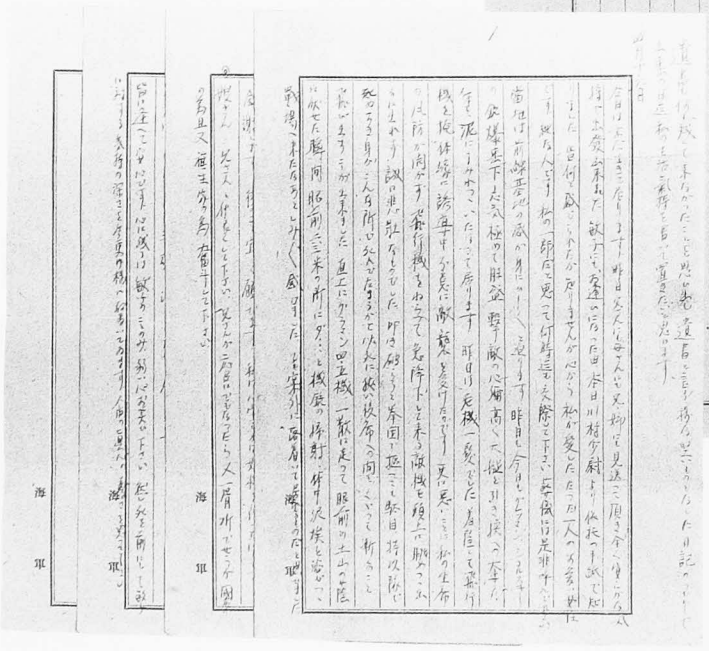
学徒出陣手牒。軍人勅諭、教育勅語などが中に印刷されている。出陣手記の欄には手書きで「身を捨てゝ国の鎮めに出でて征く心安けき朝ぼらけかな」と詠まれている。(3-191)



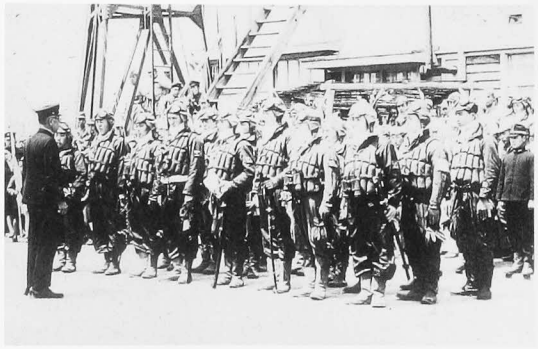
教官たちによる日の丸寄せ書き。(3-192)



出撃時の遺言。(3-194)



出撃直前の日記。「今日は未だ生きて居ります」という言葉が胸をうつ。(3-193)



串良基地における出撃直前の様子。(3-195)